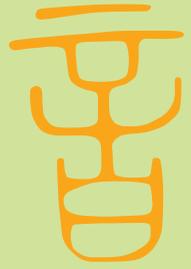


京都市立芸術大学

日本伝統音楽研究センター  
所報

第8号 2007年3月



Newsletter  
of the  
Research Centre for Japanese Traditional Music  
Kyoto City University of Arts

No.8 March 2007

目 次

所長対談 アンドリュー・ガーストル先生にきく —日本文化に対する 西洋からの比較論的アプローチ、悲劇・能・浄瑠璃・歌舞伎芝居絵— .....	3
特集 京都国際会議2006レポート ..... 竹内有一、藤田隆則、後藤静夫	18
事業紹介 「伝音セミナー」で種をまく .....	藤田隆則 24
センターニュース .....	28
プロジェクト研究・共同研究の報告 .....	33
特別研究員の研究報告 .....	39
委託研究の報告 .....	43
専任研究員の活動報告 .....	44
日本伝統音楽研究センター 概要 2006 .....	56
Guide to the Research Centre for Japanese Traditional Music, 2006 .....	58
編集後記 .....	61

所長対談

アンドリュー・ガーストル先生にきく

—日本文化に対する西洋からの比較論的アプローチ、悲劇・能・浄瑠璃・歌舞伎芝居絵—

日 時：2006年9月6日（水曜日）

14:00～15:00

場 所：京都市立芸術大学

日本伝統音楽研究センター所長室

聞き手：吉川 周平

（日本伝統音楽研究センター所長）

◆アメリカの大学

吉川 今日国際日本文化研究センターからこのセンターまでおいで下さり、ほんとうに有難うございます。先生は現在ロンドン大学アジアアフリカ研究学院の教授で、国際日本文化研究センターの外国人研究員として、日本に滞在しておられますが、この9月18日には日本を出発して帰任されるお忙しいなか、時間を割いて下さり、とても嬉しく思います。

それでは、まずはじめに、先生の御経歴について教えて下さい。先生に私が初めてお会いしたのは、1975年のことです。早稲田大学の交換教員として、先生の故郷のインディアナ州リッチモンド市のアーラム大学（Earlham College）に赴任したときで、音楽のレナード・ホルヴィック教授のお家でした。先生は大学はコロンビア大学に進まれたのですが、高校はリッチモンドだったのですか。

ガーストル そうですね。

吉川 アーラム大学はクエーカーの大学ですが、お差支えがなければ、先生がクエーカーにシンパシーを持っているかどうか伺ってもいいでしょうか。

ガーストル 私はクエーカーとは無関係ですけれど。

吉川 と言いますのは、私がアーラムに行って驚いたのは、クエーカー教徒のメディテーション（瞑想）は、宗教的な集会においてするメディテーション・フォー・ウォーシップばかりでなく、世俗的な集まりでもおこなわれ、メディテーション・フォー・ビジネスといわれるものを体験したからです。アーラム大学も、早稲田との交換協定を結んでいる GLCA（Great Lakes Colleges Association, 五大湖地方私立大学連盟）の1校ですが、アーラムから早稲田に1年滞在される交換教員の先生が沢山いて、日本の芸能を見られるとき、クエーカーのメディテーションの体験は大きな意味を持っているように思います。というのは、日本人でも退屈に思う能に興味を持つからです。

彼等の宗教的なメデイテーションは、毎週日曜日の朝、キリストの像も十字架も何もないミーティングハウスの中に座って行われます。讚美歌もスピーチもないときもあります、参列者はそれを退屈だと思ったり、無意味だとは思いません。そんな体験からすると、能は退屈どころか、すばらしい芸術だと思ったのでしょうか。『セント・フランシス』という能を作ったアーサー・リトル教授がおられ、その能のシテを舞った学生のリチャード・エマート氏は、現在武蔵野大学の能楽資料センターの教授となっているわけですから。

脱線しましたが、先生のコロンビア大学での指導教授は、ドナルド・キーン先生ですか。

**ガーストル** そうでした。ドナルド・キーン先生でした。私は大学に入った時は、別に日本のことをやる気はなかったのですが、たまたま大学2年のときに、日本に留学する機会が目の前に現れてきまして、そしてまあ冒険として、東京の上智大学に1年近く居まして、日本人の家庭の中にホーム・ステイしたりして、日本語もそれから始めまして、その後コロンビアで日本語、日本文学、日本文化の専攻にしました。

**吉川** アーラム大学でも、学生は4年間のうち1年間は、オフ・キャンパスということで、何処かへ行くということがありましたけれど、コロンビアでもそういうことを勧めていたわけですか。

**ガーストル** そうですね。その時代は、アメリカの大学は4年間でまずはヨー

ロッパに学生を送るという習慣が昔からありました。そして1960年代の終りごろからヨーロッパ以外にもいくつかの国が選ばれ、その中には日本も含まれていました。アーラムも日本へ送りましたからね、小さな大学からでもありました。

話は飛びますが、日本は島国ですから、なるべく学生を外国に留学させるようにすることが、教育のとくに学部のうちにはずいぶん大事なことだと思いますよ。まあ自分の経験もそうでしたけれども、やはり海外に行ったら、自分の国の勉強についても、比較の上では刺激にもなりますから、そういうことがもっともあっていいのではないかなと思います。

**吉川** それで、先生は上智に来られて、国際学部の方だったのですか。

**ガーストル** そうですね。国際部と留学生の特別のプログラムを受けていました。そして日本語のほかに、英語による日本文学と日本歴史と日本社会とかの講義をとりました。

**吉川** そこですでに日本に興味を持つようになられたわけですね。コロンビアに戻ってから、ドナルド・キーン先生につかれるのは、学部の3年生のときですか。

**ガーストル** いいえ、実は4年生のときでした。ですから、古文の方とあとは日本文学史、英訳でしたけれど日本文学史を。そのとき、キーン先生の授業を学びましたが、シェイクスピアの全作品の1年間通した授業もありました。

キーン先生は近松門左衛門のものを11曲くらい英訳されていますから、それを読まされて。ちょうど、むこうの大学の春の学期、つまり4年生の終わりが、同時にシェイクスピアの悲劇も沢山通して読む機会がありました。近松の心中物の『心中天網島』と、シェイクスピアの『アントニーとクレオパトラ』、『ロミオとジュリエット』のような悲劇は同時に両方読んでいたのです。そうしたらだんだん面白くなり、近松をもっと本格的に研究しようと思うようになりました。

吉川 私は1年だけですがアメリカの大学で客員教授をしてみ、アメリカの大学の教員の移動性の高さに驚きました。卒業生も何なに大学を出たということではなく、その時にいた先生、たとえば دونالد・キーン先生がいたときのコロンビア大学で学んだということに興味があると聞きましたが、今のお話はまさにいい例なのだと思います。同時にキーン先生の近松とシェイクスピアの授業をおとりになったのですか。

ガーストル いいえ、シェイクスピアは全然別な先生で、英文学のすばらしい先生でした。

吉川 そうですか。キーン先生は11曲くらい近松作品の翻訳があって、それに基づいて講義をなさっていた。そして学部を卒業されてから早稲田で修士を目指されたときには、すでに文楽の研究というか。

ガーストル そうですね。

吉川 浄瑠璃の研究を。



### アンドリュー・ガーストル

(Andrew C. GERSTLE)

ロンドン大学 SOAS 教授。日本文学、江戸時代演劇を専攻。現在の研究テーマは、上方歌舞伎と都市文化（役者、俳諧師、絵師）。1951年生まれ。

1973年コロンビア大学卒、1979年早稲田大学大学院修士課程修了、1980年 Ph.D.取得（ハーバード大学）。1980年オーストラリア国立大学助教授、1989年同大学教授、1993年1月より現職。国際日本文化研究センターなどを拠点に日本での研究活動を精力的に行う。

#### 主な著作

- Kabuki Heroes on the Osaka Stage: 1780-1830, co-author with T. Clark and A. Yano, British Museum Press, 2005
- “The Culture of Play: Kabuki and the Production of Texts,” BSOAS, 66.3, 2003
- Chikamatsu: Five Late Plays, Columbia University Press, 2001
- 「義太夫没後の近松」、『岩波講座 歌舞伎・文楽 第8巻 近松の時代』, 岩波書店, 1998
- Recovering the Orient: Artists, Scholars, Appropriations, co-editor with A. Milner and contributor, Harwood Academic Press, 1994
- Theatre as Music: The Bunraku Play ‘Mt Imo and Mt Se: An Exemplary Tale of Womanly Virtue’, co-author with K.Inobe and W. Malm, University of Michigan Press, 1990

**ガーストル** そうですね。はい。近松作品を。早稲田を選んだのは演劇の研究がさかんな所でしたから。

**吉川** それで先生には、早稲田の演劇科の紀要の「演劇学」27号に載せておられる論文がありますね。「鶴澤文蔵と近松半二の浄瑠璃」という論文ですが、これは修士論文か何かですか。

**ガーストル** ではなく、それはオーストリア国立大学にいたとき、井野辺潔先生とミシガン大学のウィリアム・マルム先生と3人で『妹背山婦女庭訓』の「山の段」の音曲的な分析、研究の本を英語で出したんです。それと同じようなことを日本語で論文に書いたものです。

**吉川** 私は学部から大学院の博士課程まで早稲田の演劇専攻でしたが、上の学年に、現在早稲田大学教授の内山美樹子さんが居られ、近松半二を高く評価しておられました。先生のこの論文で私がとても面白いと思ったのは、「人形の場合は三味線と違い、名人吉田文三郎が『忠臣蔵事件』で太夫の権利と衝突して勝利をえたことでも分るように」と述べておられるところです。内山さんは近松半二の作品の方が、上演すると近松門左衛門のよりすぐれていると言っておられました。このようなことはお聞きしたことがありません。先生によると、どうしてそういうことができたかという、ようするに「竹本座はあくまでも商業演劇であるので、紋下の此太夫より文三郎の方を擁護したのである」と言っておられますね。

ここが、消費者というかその人たちの意向によって、つまりアダム・スミスの考えなんです。選択されていくというような視点は、私たちの方にはないので、これはとても面白いと思いました。つまり、こういう人形というのが介在した変化は、人形浄瑠璃を戯曲的な、ドラマツルギーとしてだけ考えるのではない新鮮な視点だと思います。

それで、ハーバード大学に移られた理由はということだったんですか。

**ガーストル** 実は、コロンビアから本当は直接ハーバードに進学しようと一応勉強しました。でも修士課程はなかったので、日本に研究のために、ハーバードの博士課程に入る前に早稲田に来ました。ついでに正規の院生となって、修士を本格的にやりました。

**吉川** ハーバード大学にはこういう方面の修士課程はないのですか。

**ガーストル** はい、ありません。学部では一応日本語と日本学を専攻していたので、直接博士課程に入れたんです。

**吉川** 行けるわけですね。ハーバードに移ることについて、キーン先生には相談はされなかったんですか。

**ガーストル** んー、それは微妙なところですね。キーン先生のやり方と私の研究の仕方はかなり違いますね。恥ずかしいんですけど、大きいのは、ハーバードの方が奨学金を出してくれたんです。それで勉強できたんです。実は。

**吉川** 私は早稲田の文学部に入って、修士、博士課程、また演劇博物館の助手

や囑託として、20年間早稲田に居ました。指導教授の郡司正勝先生は歌舞伎研究の第一人者でしたが、寛容な先生であったので、私は國學院大學の国史の岩橋小弥太先生、民俗学の坪井洋文、石上堅の両先生、法政大学の能の表章先生の授業を聴講することが許されました。

郡司先生が後継者に選ばれた鳥越文蔵先生は、厳格な文献学者で多くの人材が育ちましたが、先生が2005年の〈大坂歌舞伎展〉で取り上げられて、生きいきとした役者の絵画資料を活用されたことは、私はとてもすばらしいと思いました。こういう研究はどのあたりで考えつかれたのですか。

#### ◆浄瑠璃から歌舞伎の研究へ

ガーストル 一つは先程の『妹背山婦女庭訓』の研究の一応の成果を出して、もう一つは6年前ですけど近松門左衛門の晩年の5曲の大きな時代物の英訳を出したんです。近松を結構長い間やっていますから、次に大坂歌舞伎、上方歌舞伎の研究をしようと思ったんですね。で、前から松平進先生とも研究していたんですが、浄瑠璃と違って歌舞伎はどうしても、誰でもわかるように、役者中心にできているものです。テキストはありますけれども、歌舞伎はそのテキストを基本的には出版しなかった。浄瑠璃は上演のとき、初演のときにも同じようにきちっと出していますけど、歌舞伎は通して劇場からは

出版しなかったんですね。ですから、役者を中心している絵の資料が、役者をどうとらえるかということが大切です。ロンドンにもイギリス全体にも結構役者絵の資料がありましたから、大英博物館のティモシー・クラークさんという協力者と相談して、役者絵を探りに調査をしました。

絵の世界に入ったら、歌舞伎文化が面白くなりましたね。役者は歌舞伎の舞台の上でも活躍しましたが、それとはまた別に俳諧の世界とか、狂歌の世界でも活躍しました。たとえば初代の中村富十郎は結構絵師としても認められて、その時代に活躍したこともありました。特に俳諧狂歌を通して沢山の文人、公家から百姓町民までいろんな人との出会い、それからパトロンとの付き合いも大事だったんでしょう。実際の役者絵にも摺物にも、そういうネットワークが機能していました。ですがこの分野の研究はほとんどされてないんですね。

もう一つ面白かったのは、浮世絵というものは江戸にしかなかったというようなイメージがありましたが、そうではなく、実は大坂にたくさんあったということです。肉筆のもの、歌舞伎関係のもの、摺物、江戸にないようなすばらしく大きい綺麗な、丸山四条派の絵もあって、いろんな絵師が関わっていました。もちろん歌舞伎関係の役者絵が多くて歌舞伎がひとつの文化の中心でした。そこに役者のひいき蟲貞連も加わります。蟲貞連も浄瑠璃、長唄、踊

りをやったりして、役者がそれを教える場合もありますし、両者の付合いは遊芸や俳諧も含めてでしたから、研究してみるとずいぶん面白かったです。それと、もう一つつけ加えるなら、やっぱり江戸と違うということが面白かったですね。

#### ◆上方と江戸の歌舞伎の相違

**ガーストル** いろんな意味で違うんですけど、様式的にどうしても大坂とか京都のものの方が、写実的です。写実的という言葉はむずかしいんですけども、江戸の理想化・様式美というより、肉体の生なましさとか肉感的な描写が生きています。ある意味では浄瑠璃の感情的なものに関係していますし、歌舞伎の中でも物語的・心理的な大げさな演技より、人間の感情・人間の生なまさを写実的に扱う手法は上方の方が顕著にありました。

江戸の歌舞伎の歴史においても、荒事はともかく、ほんとうは19世紀の歌舞伎が重要なんですね。並木五瓶が寛政(1789～1801)ころに大坂から江戸に移って、四世鶴屋南北とかその後の時代の者を育てる。それで、江戸の歌舞伎が物語としているんな意味で面白くなっていくんです。そういう大坂の影響力は見のがせません。

先の〈大坂歌舞伎展〉も大阪ではまあまあ入りは悪くなかったんですけども、東京でそれほど話題にならなかったのは一寸残念でした。

**吉川** 私は個人的なことですけど、大阪府の堺市で生まれていて、戦争の時代に秋田に疎開しましたが、大体は東京育ちです。そうすると、東京の方としては歌舞伎といっても、ほとんど東京の歌舞伎しか頭にはない。先生が言われたような浮世絵の役者絵に関しては、大坂の絵を見付けても買おうという気にはならないのですね。そここのところが、さっき江戸の方は理想化あるいは様式美化してしまったとおっしゃったことと関係していて、理想化しているようなものが歌舞伎だ、荒事なんかも様式的なものだとして評価し、それが演劇関係の者としても、私の眼を一方的にしか向かせていないのだと思うのですね。それを先生がそういう見方ではなくて、御覧になっているのはすばらしいことだと思います。

郡司正勝先生も早稲田の演劇博物館に勤務しておられたときに、先生と同じように、芝居絵の整理をすることによって、歌舞伎のイメージが具体的に膨らんだのだと思うのです。私も演劇博物館の助手になるとき、所蔵の錦絵を全部見られたらと思いましたが、当時は申し出ることもできませんでした。

**ガーストル** ほおう。

**吉川** それが大英博物館などは研究者には、ある意味で使わせているのだと思うんです。この前先生のロンドン大学のお弟子さんの一人と同席したときに、「あなた方大学院生でも見るのが許されるか」とお聞きしたら、「ある程度テーマをちゃんとしていれば見せて

もらえる」ということでした。イギリスとかフランスの博物館や美術館が収集した外国の資料を、人類共通の財産として活用していることは、大いに評価できると思うんですね、大英博物館についても。

#### ◆パフォーマンスの翻訳

吉川 先生がおっしゃっている中でもう一つ興味深いのは、パフォーマンスの翻訳をするときに、すぐにそれは黙読するものではないという問題に引っ掛かるということを書いておられますね。さっき私は文献資料派の研究者の弱点というのは、対象を自分の眼で見て、それを言葉によって認識するのだと思いますけど、その作業をされないで誰かが文字化したもので研究している場合には、本物と対決しないことになりますね。

ガーストル 浄瑠璃の場合は、まあ歌舞伎もそうですけど、まだ生きてますから。でも、たとえば近松門左衛門の作品を、大学とか学校で教える場合には、いわゆる国文学的な読み方をすると思うんですね。近世の俳諧、西鶴、上田秋成などは同じように、あるいは『源氏物語』と同じように。私は作品を理解するために義太夫節も少しは習いました。そうすると、近松門左衛門をはじめ浄瑠璃の作品は、作者が頭の中で音曲によって文章を拵えていたことが体験的にわかります。

昔は「読む」という意味は、作品を

再現すること、下手であっても自分も役者や演者になりきるといったことではないでしょうか。ですから、今の普通の読み方で近松を読んでいると、息苦しくなる、近松を殺していることになる。読まない方がいいぐらいに思いますから、それをどうすれば良いか。

もう一つの大きな問題は、近松門左衛門のような難しいものに、どうやって今の若い人が興味を持つかということです。普通の読み方では興味は湧いてきません。例えば先生が関西の人だったら、関西弁をあるレベルで工夫して、読み方を面白くすれば、学生はびっくりしますね。そういう生きいきしてくるような工夫をしないと、国文学は全体的に今でも危機感がありますからね。女子学生でも国文学専攻を選ぶ人は少なくなりました。昔だったら自分の国のものが目の前にあるから勉強する。そういう時代は終わっていますからね。ですから、何でこれが「面白い」か、もう一つは何でこれが「大事」か、もう一つ、これは「楽しい」ものなんだと…。

文化的なものは、もともと娯楽でしたから、お金を出して一生懸命やるものでした。今の時代、若い人は全世界的に音楽なしには暮らせない。皆イヤホンを耳から下げている。そんな若者がほとんど全世界にいて、音楽のためにお金をつかっている。これはある意味では、昔と変わっていないのです。ですから、古典であるということを難

しく考えない方が良いと思います。

例えば古典を教える時にポータブル・レコーダーを使ってもいいし、まあ実際には難しいんでしょうけれども、自分も工夫していかなければ、なかなか昔の日本の伝統的な音曲を、生かすということは難しいと思いますよ。

**吉川** 私は幸いなことに、早稲田大学から12校で組織されていたGLCAのジャパン・スタディー・プログラムの拠点校であるアールム大学に赴任したとき、そのプログラムが所有しているオーディオ・ヴィジュアルの資料を授業に活用できました。1975年当時ですから、まだビデオテープではなくて、『日本の舞踊』とかさまざまな映画をずいぶん使いました。というのは、たとえばジャパニーズドラマという1回が50分の授業を、英語で言葉だけで理解してもらうのは不可能だからです。それで沢山の映画を使えたのは幸いでした。そして、能の映画を見せた時に、仮面を着けていますから、「どうして前シテと後シテが同じ俳優が演じているとわかるのか」、といった日本にいるときには考えたこともないようなことを質問されたのはとても良い経験になりました。

私自体はその時35歳で、盆踊りの研究から日常の歩行とは完全に異なる足の動作を発見して、それを尺度に動作の面から民俗芸能の研究を進める足掛りを捉まえたところでしたので、アメリカに行ったら研究の進展はどうかと思いましたが、とてもよい体験を

させていただきました。

とくに、アメリカでは今何故それをするのかということがとても大事で、日本での何時か役に立つかも知れないからとするやり方と違っているのを見、今の時点ですべきことがあると知ったことはとても良かったと思います。

先生の翻訳の話に戻りますと、浄瑠璃の詞章を全部諳んじていても、それは翻訳という作業とは別なことで、ほんとうの意味で内容を認識しているということにはなっていないですね。私の分野でいいますと、踊りを習って同じように踊れるということは、その踊りの内容を認識したことにはならない。やはり、自分の言葉で再構成しなければ、ほんとうの認識にはならないと思います。

先生は先程学生にとって外国に行くことが大事だとおっしゃったんですけど、私は自国の文化を外国語で話してみることはとても大事だと思いました。

浄瑠璃についても、演劇面から読んで近松門左衛門よりも、現在までさかんに上演される近松半二の方がいいと考えられる人もいますが、先生がおっしゃったような近松作品の読み方をすれば、近松門左衛門が書いた作品をもっと高く評価したかもしれませんね。

翻訳することは、対象の細部まで検討することなんだと思うんですね。そして違う文化で、とくに言語が違うわけだから、とても大事な作業ではないかと思います。

**ガーストル** 私も翻訳を今まで結構やっ

てきましたけれど、翻訳はむずかしいことは確かですが、翻訳するには作品をこまかく間違いなく理解しなければ、他の言語にはできません。それが難しいんですね。それからもう一つは、内山美樹子先生みたいに、何から何まで暗記する能力も、重要なことです。ある文化に参加することができるんですね。

### ◆日本人の教養

ガーストル 〈大坂歌舞伎展〉であらためて、驚いたというかすばらしいと思ったのは、日本の社会の江戸時代から大正時代まで教養がずいぶん高かったことです。その教養というのが、いわゆる学校で習った教育ではなく、遊芸、いろんなお稽古事、かなり広くお茶から書、もちろん俳諧とか音楽もいろいろ。江戸中期よりもっと前からですけど。中期からはかなり大衆化して謡曲も入りました。それを電気の時代に入ってからのように、皆が一方的に聞くというのではなく、カラオケと同じように自分の番がまわってくると自分も演じなければならない。そういったことは江戸時代にはずいぶんいろいろとありました。

たとえば、ここの大学の先生方が集まって、皆が1句の俳句をよめるかといえ、一応その場でできるかも知れないんですけど、でも全員の日本人がある程度俳諧ができたということは、あの時代では、すごいことですよ。義

太夫ができるということも、同じような教養の高さを示します。そういうようなことがなくなりましたから、たとえば今の日本人は恥ずかしがりやとか言われますが、かつての日本人が全体としてそうであったとは、私は全然思いません。教育システムが変わってきたり、全体の社会がいろいろ変ってきたことの方が大きかったです。

教育面においては、とくに芸術大学だったら、参加すること、ただ絵を勉強するのではなく、自分が描かなければならないということが基本でしょう。同じように、伝統芸能のすばらしいものを素材として、今またどうやって生かしていったらいいかということを考える必要性は、誰もが感じているでしょうけど。どうやってすれば、大学の中だけじゃなく、もっと広く生かせるかということを考えるのが課題だと思います。とにかく好きになったら、すぐく一生懸命にやるんですから、それを生かさないとね。国文学だったら難しい文章だけを読んで、苦労ばかりでしょう。でも興味が湧いてきさえしたら、一生懸命やるのですから。

私は最近日本の大学教育に関わることがありますが、日本の大学教育には感心できない点があります。というのは、学生に疑問を持たせたり、いろんなことを自由にやらせたり、そういう刺激があまりないんです。大きな大学よりも小さい大学の方が教育を真面目にやっていると思います。ただなかなか学生は、自分の判断で、自分で疑問

を持って、自分で調べたり、そして自分の意見をはっきり言えるようになるのは少ないですね。

**吉川** 私はそうした意味では、郡司正勝先生についたことは幸せだったと思っています。私が早稲田の文学部に入った1959年には、文学部は入学試験のときから、専攻専修別に別かれていて、芸術学専攻演劇専修の演劇科しか受験できない。だから、郡司先生は最初の授業で、まず「あなた方は可哀相ですね」と言われたんです。出世のコースから外れたところに入り込んだとおっしゃって、しかしまた演劇のことに没頭すれば、それなりのこともあるとも言われました。それから、「大学という所は本を読む所ではなく、先生が何に興味を持つかを見る所だ」とか、もう一つ「まず面白いと思って、それが何故かということを考えるのだ」とか、学問をする基本的な態度についておっしゃっていました。前に大学でどの先生が居た時期に学んだかということが大事だと申しましたが、私はある意味で、早稲田の演劇科の黄金期に学ぶことができたと思っています。

#### ◆ガーストル先生の「悲劇論」

**吉川** 先生は国際日本文化研究センターの講演会で述べられた『能と文楽における「悲劇」－比較論の立場から－』（1990年）の中で、すばらしいことを沢山指摘しておられます。その中で、特に私が興味深く思ったのは、「能と浄

瑠璃のばあい、主人公は神様に操られることもなく、それどころか主役は自分の意志で自分の行動をおこすのが普通でしょう」と述べておられるところです。こういうことは日本人は普通あまり考えていないことだと思います。たとえば、河竹登志夫先生は中世の能は事柄を述べて、近世の歌舞伎や文楽は情を述べると、早稲田の国際部の講義で指摘されていました。

ところが、先生の論文では、中世の能で女性を主人公とした鬘物などでは、「欲望」の葛藤があって、情のことを言っているのであって、能は事柄を述べているものだというような大きな掴みでは駄目なんだということがわかったんですね。それは先の文に続けて、「能では修羅物、鬘物などは仏教の『欲望』が苦しみの元であるという観念の上で出来ていますから、主人公が自分の煩惱、執着を捨てられるかどうかは作品の頂点です」と言っておられますが、こういうこともあまり他の人が言っていないことではないかと思います。また、能の『敦盛』の筋の構成を述べた後に、「しかし修羅物は1日の番組の愁嘆の頂点ではなく、悲劇とは言いがたいと思います」と言っておられますが、こういう考え方も普通日本人ではあまり考えるに至らない考え方ではないかと思います。

先生は『葵上』についても1日の能の番組の愁嘆の頂点ではないとして、続いて「四番組物の『葵上』を取り上げれば、嫉妬が主役を占めます。六条

御息所の生霊が葵上を襲うのですが、僧侶が中に入り、とうとう生霊を鎮めます。このドラマはすばらしい演劇だと思いますが、憂い・愁嘆の頂点ではないでしょう」と述べ、さらに「その頂点は明らかに三番の鬘物にありましょう」と言っておられますが、こういう考えは聞いたことがありません。

#### ◆対象を見る視点の新しさ

吉川 このような新鮮な分析は、先生が獲得している新しい視点から生まれるのではないかと思います。と言いますのは、日本の民俗芸能の一つである地方の神楽の分布を検討する場合に、第一人者であった本田安次先生と、石塚尊俊氏と私の地理的視点の相違による差が思い浮かぶからです。本田先生は神楽の研究を東北から始めて南の九州にまで及んだのですが、石塚氏は本州の島根県に住んで、西日本の諸神楽の研究をし、私は本土の最南端の鹿児島に住んで特に鹿児島と宮崎両県の南九州の神楽のフィールドワークをしました。その結果、神楽の分布について、本田先生は「全国津々浦々にある」とされ、石塚氏は「鹿児島県まである」と言われましたが、私は「鹿児島島の本土まではあるが離島にはない」と述べました。これは、研究者が住んでいる地理的な相違による視点の違いによるものですが、依拠している文化の相違による視点の違いは、文化的な対象の研究にとってはとても大事なことだ

と思います。

先生は西洋のことについて深く研究したうえで、日本のことを分析してもらえるので、違いが明確にわかるのだと思います。日本の中でしか見ないと、どこまであるのかということがわからないのだと思います。

先生によりますと、アーサー・「ウェーリー氏は不思議に鬘物の作品を一曲しか英訳し」なかったそうですが、ウェーリー氏は先生と違って鬘物のこうした重要性はわからなかったのだと思います。そして先生のお考えですばらしいと思うのは、「上品な女主人公たちでありながら、鬘物の能では人間本能と仏教理念の衝突が激しいと思います。幽玄の理想の世界ですから、表面はきれいで静かであっても、その裏の情熱・意志はギリシャなどの他の劇にも負けないでしょう」というところです。

そして、「恋物語が段々音曲の拍子にのっていき、クライマックスに向かいます」というところも、言葉だけではなくて、能の謡を「音曲」といわれるように、先生は絶えず音楽的な要素を考慮に入れておられ、聞く人たちがそれによって、のせていかれるのだということを取りあげておられるのだと思います。

続けて、「その時かたみの恋歌が引っかけになり、主人公が執着をすてるかどうか選択しなければなりません。恋を否定すれば地獄から極楽へ行けますが、それを知っているのに恋の道を選

び、一瞬の喜びを味わってから、苦しい迷いの世界に戻ります」とおっしゃっておられます。この部分に関連しては、戸井田道三先生が「時間の可逆性」という表現で言っておられます。能は繰り返し上演されるものですが、私たちが同じ曲を何度でも見るのに耐えられるのは、まさに先生が言う「選択」があるからです。時間の可逆性もありうるのに、能の主人公は楽な生き方を選べることを知りながら、「一瞬の喜びを味わう」ことを選び、時間の可逆性を断ち切ってしまう。先生は「それを知っているのに恋の道を選び、一瞬の喜びを味わってから、苦しい迷いの世界に戻ってしまう」ということで表現されました。

先生はまた『野宮』の六条御息所も適例でしょう。舞台の上で、二時間近くほとんど動きがありませんが、クライマックスは主人公が光源氏への苦しい恋を捨てるかどうかの瞬間でかた足は鳥居の境を踏まえて、『火宅の門をや、出でぬらん』という文句で作品が終了」と述べておられますが、このような捉え方は、能だけあるいは日本のことだけの研究からは出てこないと思います。

それで先生は、西洋人にとっての「芸術の最高水準のアイスキュロス・ソフォクレス・シェイクスピア・ラシーヌ」と4人挙げた中の、17C フランス古典劇の代表者ラシーヌの作品『フェードル』を対照しながら、「西洋の悲劇から見る時鬘物がか弱くみえることが

あ」るのは、「能は舞台もきれいですし、女主人公も位が高い上品な方が多い」からと、「世阿彌が主張した『花』が能の目的だということも悲劇の武者英雄のイメージから遠い」からだと考えておられるようにおみうけしました。

私は先生の西洋における悲劇論、悲劇作品の理解から到達した、能の鬘物の悲劇性の高さの指摘はほんとうにすばらしいと思います。

話は少し戻りますが、先生は『野宮』の最期の六条御息所の「光源氏への苦しい恋を捨てるかどうかの瞬間」は、「人間の情愛と理性の衝突による緊張感のすごい一瞬で」、二つの点に注目したいとおっしゃっておられますね。その「一つは主人公が自分を見つめながら意識の上で行動を選ぶことです」ということですが、私は次の御指摘が先生のパフォーマンスを捉える力の源泉のように思います。

すなわち、先生は「もう一つは『松風』、『野宮』、『井筒』などがカタルシスをおこすために芸能としてしぐさも音曲も必要」だと指摘しておられます。そして、「観客が参加してリズムにのらなければ体で感じることにな」らないという部分に共感します。そうして、私の強い味方になるのは、近年の能の観客が演能の最期に、何回にも分けて拍手をするのは、折角の上演の効果を台無しにすることだと思おうのですが、先生は端的に「能が成功したら、見ている方も疲れはてて拍手がでないはずです」とおっしゃっている。

先生のこの悲劇論は、演劇や能について考えようとする学生に、ぜひ読ませたいものだと思います。

#### ◆「ああ」と感ずる一音

吉川 私がアーラム大学に行ったとき、日本に交換教員で来たアーサー・リトル教授たちが、日本の能や歌舞伎が、音楽と美術とドラマが総合的に構成されているからと、ミュージックとアートとドラマを一緒にしたMADという授業をしていました。もちろん日本の芸能は3つの要素を統合してできたのではなく、成立時から未分化なのだと思います。ですから、この日本伝統音楽研究センターにおいても、芸能の中にある音楽という点を考えなくてはならないと思います。

そういう点で、先生が世阿彌が『拾玉得花』で言っている「見所人の『ああ』と感ずる一音」の例として、歌舞伎座で御覧になった『一谷嫩軍記』の「熊谷陣屋」の段の記述はとても興味深いです。「まず、敦盛の母藤の方の恨みに会い、敦盛の最期のけなげな姿を物語ながら、藤の方の心を静める一方、後に妻相模に、実は息子を殺したと告白」するところのことです。ここで先生は、「この筋が太夫の語り口と三味線のリズムにのり、盛り上がったり、しずんだりしてはこばれていきます」と、音楽の効果を指摘しておられます。別に音楽の論文を書いているという意識がなくて、書いておられるところが、

すばらしいと思います。

そして、もっとすばらしいと思うのは、イギリスの作家ドライデンが1668年に言ったことと、竹本義太夫がその20年後に同じ川の比喩を利用して、浄瑠璃について論じたというような、誰にもできないような肌理細やかな、ほんとうに文字通りの比較検討の仕方です。すなわち、ドライデンは「悲しみと情熱は、大雨によって小川が溢れるようなもので、すぐ又乾いてしまう。激しい感動だったら、我々も気持ちも溢れるだろうが、ゆっくり降る長雨だったら元のながれに影響なく、ながれてしまう」と言っていると紹介され、義太夫については次の文を浄瑠璃論としてあげられました。

すなわち、「せりふは川瀬のごとく、ふしは淵のごとし」という文と対比されました。東西の表現について、同じく川の流れの表現で比較されていますが、私はほんとうの比較演劇学というのは、こういうレベルの表現要素を、多数集めて比較検討することが必要ではないかと思います。ですから、ワーグナーの1871年の「オペラの目的」というエッセイの、「歌とセリフの出会いについて」の箇所もすばらしいと思ったんです。要するに感性というものを持たなければ、研究はその人の生きたものになっていかないという例をお示し下さったように思います。それが先生の歌舞伎絵のこともそうですし、悲劇論というある程度抽象的なことをやりながら、能の中のこの文章がこうだ

という具体的な捉え方が、私にはとても勉強になりました。

## ◆西洋と日本における悲劇

ガーストル 悲劇論を論ずるのがとても難しいのは、一つには西洋ではもう思想の問題になっていますからね。私が『能と文楽における「悲劇」－比較論の立場から－』の、「悲劇－比較論の立場から－」の論文を書いたときは、悲劇はギリシャもそうですけれども、世阿彌の論じているものとか、義太夫とか、近松門左衛門の世界では、悲劇は文章の上のものではなく、体験のカタルシス、つまり体で感じるというものです。音曲にはある意味で人間をのせるような力があります。シェイクスピアにも音曲はありますが、悲劇にはあまり使わない。ただ言葉には結構リズムがあって、それにのっちゃん訳です。オペラもそうですけど。あれを書いたときには、一般的には、謡曲、浄瑠璃、近松門左衛門にも、ヨーロッパに比較して悲劇というものが無いと言われていました。それが普通に長い間論じられていました。

日本の中でも同様に論じられていましたが、私はあまりにも悲劇を狭く見た議論ではないかなあと思いました。または悲劇というものを理想化して、崇拜の対象にしているのではないかなと思ったんです。ギリシャの古典やシェイクスピアといった崇拜的な悲劇を他のものと比較するのは、理想の西洋

文化が攻撃されているような雰囲気を作り出しかねませんでした。

しかしながら、劇場の中で経験される人間の深い所の体験、ひろい意味の悲劇というのは、人間の一番苦しいとき、死との出会いです。日本の演劇、謡曲でもそうですが、とにかく浄瑠璃はすごいんですよ。浄瑠璃の作品は1500以上ありますけれども、ほとんど全部が死との出会いですね。誰かが犠牲になるか、誰かを犠牲にするか、自分の子どもか何かを。

で、死にたどり着く前までは、やっぱり音曲がなければ、悲劇にならないと感じていたんです。多分ギリシャでもそうだったと思います。

吉川 あと最後にもう一つお伺いしたいと思います。それは、前にあげた先生の「能は舞台もきれいですし、女主人公も位が高い上品な方が多いので、西洋の悲劇から見る時鬘物がか弱くみえることがあります」というところです。これは「世阿彌が主張した『花』」と関連している表現のところですが、「か弱くみえる」部分に強さが潜んでいるのを発見されたことがすばらしいと思います。

郡司正勝先生が1968年に韓国旅行から帰国されたときに、何日間も高熱が続き、死ぬかと思われたことがありました。腸チフスだったのですが、退院して私におっしゃったのは、『桂川れんりのしがらみ連理柵』の長右衛門のことです。私に郡司先生は、それまではわからなかったがその病気をして、若い娘のお半に、

分別を持って行動すべき熟年の長右衛門の、道からはずれたことをしてしまうという、人間の弱さを認めて書いた作者の近松門左衛門はほんとうに強いのだとわかったと言われたのです。

私は時々郡司先生から聞いた言葉を思い出すのですが、それは先生御自身でその時に発見したり思いつかれた言葉なのだと思うのです。近松の良さの一つがこういう所にあると発見されるのは、命懸けのときののだと思うんですね。だから浄瑠璃が皆死ということとかかわっているというのは、いま日本人が失ってしまっている命懸けとか死にものぐるいとかいう感覚を、もう一度浄瑠璃を通してとか…。

**ガーストル** ただ、普通は死では終わらないんですね。つまり、個々の作品は、普通は目出たく美しく終わりますから。だから悲劇ではないと論じられてしまう。謡曲の一日の番組もやはり祝言で終わります。ただ、それは悲劇であるかどうかという議論とは関係ないと思うんです。人生というものは大きく見ると、絶えず変わっていくもの、回っていくものですから。

観客が作品中の死を乗り越えて、安定した世界に戻る。それは、自分自身の体験として戻る訳です。六道輪廻みたいなものですね。フィクションの世界の死の経験を、自分の日常、毎日の生活に生かすということはすばらしいと思います。歌舞伎は死の概念で遊ぶところがありますから扱いにくいですけども。

**吉川** 浄瑠璃は五段構成で、その中でそういうものを見せて終わるというわけですが、先生はカタルシスというのが大事な問題だと思っていらっしゃると思うんですよね。で、それなんかも含めて、アリストテレスの『詩学』に書かれているものを、浄瑠璃の世界で取り上げると、どういうものを言っているのかというようなことを、やらないと演劇の研究ではつまらないと思うんですよね。

それなのに何が一番大事かということを考えずに、アカデミックな研究をすれば良いとか、ただ精密で正確な研究であればいいというような今のアカデミックな世界はとても残念だと思います。

**ガーストル** 大きなテーマですね。

**吉川** 今日はいろいろいいお話を伺うことができほんとうに有難うございました。

## 特集

## 京都国際会議 2006 レポート

2006年10月上旬、京都市立芸術大学の美術学部・音楽学部・日本伝統音楽研究センターの共同により、「京都国際会議 2006 芸術がデザインする平和のかたち」が開催された。会議の本編は、10月6日、リービ秀雄氏による基調講演、そして中西進学長・尾池和夫・片倉もとこ・リービ秀雄の各氏によるオープニング・シンポジウムで幕を開け、9日までにさまざまなイベントが組まれた。ここでは、10月7日を中心に開催された日本伝統音楽研究センター主催セッションについて報告する。なお、センター主催の各セッションは、(社)東洋音楽学会大会2006との共催として開催された。(竹内有一)

### ◆展覧「日本伝統音楽研究センター所蔵 田邊コレクションの楽器」

日時：2006年10月4～9日 10:30～16:00

会場：日本伝統音楽研究センター7階展示ギャラリー

楽器展示制作：三木俊治（日本伝統音楽研究センター委託研究員）

文献展示制作：奥中康人（日本伝統音楽研究センター特別研究員）

参加者数：約280名

日本伝統音楽研究センターには、日本・東洋音楽研究の草分けの一人である田邊尚雄およびその子息の田邊秀雄によって収集された、300余点の楽器資料（以下、「田邊楽器」と記す）が収蔵されている。2004年度より日本伝統音楽研究センターで田邊楽器の基礎調査および保存修復に従事されている三木俊治研究員の献身的な作業によって、今回はじめて、田邊楽器の実物を展示公開できることとなった。なお、田邊楽器の概要は、『田邊尚雄・秀雄旧蔵 楽器コレクション図録』（2006年3月、日本伝統音楽研究センター発行）に記述され、日本伝統音楽研究センターの収蔵資料データベース・アルタイズ（webで公開）でも一部のデータが閲覧できるので、あわせて参照されたい。

田邊尚雄が大正時代から収集した楽器群は多種多様で、1680年代の七弦琴に始まり、明治から昭和期の和洋折衷創作楽器に至る、日本音楽の俯瞰的資料となり得る楽器類にとどまらず、海外調査・交流の記念として贈られた、国外の高品質な資料も数多く含まれている。子息の秀雄の収集したインド・ネパール関連の楽器にも、秀雄の日印交流の成果に対し、現地機関より贈呈された、記念碑的なもの



のが数多くある。こうした数々の楽器の中から、古典的・伝統的な楽器を中心に地域ごとに分類して、下記の楽器がキャプションとともに展示された（楽器名のあとの数字は管理番号。）

- A 東アジア圏 <日本> 七弦琴 (016)、平家琵琶 (037)、トンコリ (001)、<台湾・中国・朝鮮半島> 儀礼用竹笛 (077)、排簫 (303)、簫 (洞簫) (132・133・135)、フン (095)、シュン (092)
- B 東南アジア圏 <オセアニア・インドネシア> 鼻笛 (140・143・144)、トンガリ (145)、フェク (牧笛)、(146)、クンドゥ (203)
- C 南アジア圏 <インド・ネパール・チベット> チョ・ンガ (197)、カン・リン (174)、ナルシンハ (175)、コール (206)、ラバナハッター (59・60)、セタール (参考出品、音楽文化総合研究所所蔵)

あわせて、奥中康人研究員が、田邊尚雄の著作物・自筆原稿・ノートなど、彼自身に関わる文献資料の展示制作を行った。田邊尚雄の一人の人間としての横顔が、多角的に描き出された。

(竹内有一)

◆ワークショップ「日本伝統音楽研究センター所蔵 田邊コレクションの楽器」

日時：2006年10月7日（土）11:00～

12:00

会場：日本伝統音楽研究センター7階合同研究室1

制作・進行：三木俊治（日本伝統音楽研究センター委託研究員）

実演協力：三木理恵・大森秀則・田中峰彦  
参加者数：約40名

田邊コレクション楽器のうち、明治から昭和期に創作された、さまざまな和洋折衷創作楽器が、三木研究員による解説と、実演協力者による試演によって、史上初めて公開されることとなった。

紹介された楽器のほとんどは、長期にわたり全面的な修復作業および修復方法の研究、また演奏法の調査と研究が必要とされ、先行研究も皆無のものばかりであった。今回のワークショップは、そうした一連の研究に従事されてきた三木研究員による研究成果を中間報告する機会でもあった。

三木研究員の調査によれば、多くの楽器創作者が、楽器研究の第一人者だった田邊尚雄に認知されることを願って、さ



まざまな試作的な楽器を自発的に寄贈しに訪れたのだという。戦争と平和に揺れ動いた社会的な背景や、こうした楽器が開発・保存されてきたことの意義を考察しながら、よく知られた親しみやすいメロディーを用いて、次の楽器が試演された。福月 (040)、五十二弦琴 (015)、大正琴 (022)、花月ハアブ (021)、学校教育用の縦笛 (073・088)、ピクラ (087)。

なお、これらの楽器との関連において、シタールなどの民俗楽器、現代の創作楽器を交えた自由な合奏も行われ、会場の気分が盛り立てられた。

(竹内有一)

#### ◆講演「音楽の知そして平和」

日時：2006年10月7日 14:00～15:30

会場：京都市立芸術大学講堂

講師：ボニー・ウェイド Bonnie C.Wade

司会：藤田隆則（日本伝統音楽研究センター助教授）

参加者数：約280名

元アメリカ民族音楽学会の会長で、現在も、カリフォルニア大学パークレー校の音楽学部で、学部長としての激務のかたわら、民族音楽学の教鞭をとっておられるウェイド氏を、講演者としておむかえした。アメリカにおける秋学期の真最中、学校を離れる事はあまりこのましくない時期に、約一週間の期間をわれわれのためにつかってくださったウェイド氏に、最初に感謝の意を示しておきたいと思う。

ウェイド氏を「芸術がデザインする平和のかたち」の講演者としておむかえしたかった理由は、主にふたつある。

ひとつは、氏が、現在オックスフォード出版局から刊行されているグローバル・ミュージック・シリーズの編集主幹であるという点である。このシリーズは、ある意味において、民族音楽学の一般向け教科書として画期的なシリーズである。これまでの民族音楽学が、大学において与えられていた役割は、いわば、「音楽によってめぐる世界の国々」というようなものだった。もちろん、民族音楽学は決してそのようなお気楽な学問ではないのであるが。

ウェイド氏は、古くから、そのような（世界漫遊的）教科書とはちがうあり方の教科書を構想しておられた。それが、グローバル・ミュージック・シリーズという画期的なシリーズとして結実した。グローバル・ミュージック・シリーズは、世界の音楽旅行をめざすかわりに、異文化の音楽を理解することがどういう営みであるかということに焦点をあて、民族音楽学の目の付け方や考え方を伝えるということを中心としたシリーズである。その編集主幹には、はたして、音楽と平和との接続を、どのように語ってもらえるのだろうか。

もうひとつは、世界の民族音楽学者の中でも、ウェイド氏は、古くから日本とのつながりをもっているという点である。ウェイド氏は、修士論文を書くため、日本を調査地にえらんだ。自身の民族音楽学の研究を、日本の古典音楽（箏曲）の

研究から出発させたのである。その後氏は、フィールドをインドにかえ、精力的な研究を展開されてこられたが、ほぼ10年前から、日本の現代の音楽状況全体を見渡すという仕事にふたび従事しておられる。その成果は、グローバル・ミュージック・シリーズのうちの一冊として一昨年刊行された (Music in Japan)。ウェイド氏ならば、日本の音楽に対して、日本において日本伝統音楽研究をおこなっているわれわれセンターの視点とは、ことなった視点を提供してくれるかもしれない。

以上のような期待をこめて、講演をお願いした。交渉のすえに定まったタイトルは、Musical Knowledge and the Advocacy of Peace (音楽の知そして平和)。当日の講演は、ウェイド氏自身の希望もあって、日本語での講演となった。配布資料としては、元の英語の原稿と、その翻訳である読み上げ原稿の両方を用意した。

講演の内容は、ウェイド氏自身が自ら経験してきた学問の歴史的な変遷をたどることを、その骨組みとしていた。民族音楽学は、1930年代から50年代にかけ

て生成し、発達してきた学問であるが、その初期においては、当然のことながら研究対象は音そのものであった。音や音楽を担っている文化は、それぞれ、静止しており閉じたものとして見られていることがおこった。

その後、文化人類学の影響もあって、民族音楽学は、焦点を異文化の音そのものから、音をあつかっている人間へと移していった。このこと自体は、民族音楽学の学説史としてよく知られていることであり、とくにめずらしいことではない教科書の知識なのだが、50年代以降のそういった変化を直接つくった人物を、直接に知り、交流してこられたウェイド氏の語りには、それなりの迫力が感じられた。

それに加えて興味深かったのは、ウェイド氏が、上にふれた「音そのものから人間へ」という焦点の移行を、純粹に学問的な内的な展開として見ているわけではない、つまり、理想化してはおられないという点であった。その移行には、1950年代から60年代以降のアメリカ合衆国における、ほとんど国策ともいえるべき、異文化研究への関心のたかまりという背景があることを、氏は指摘しているのが興味深かった。

そしてさらに興味深かったのは、それが国策的であるにせよ、その良質な側面をつかみ出していこうとする、ウェイド氏の態度である。ウェイド氏の話は、自身が大学の授業において、民族音楽学のプログラムをどのように構成していったか、という点に向かった。ウェイド氏が、



異文化理解のためにおこなった、実践的な試みの一例として、日本からの講師をまねいて学生中心にとりくんだ、能の再現などが、ビデオで紹介されたのである。

こういった試みは、すべて「異文化の理解」というゴールに集約されていく。異文化の理解は、そのまま他者とのコミュニケーションであり、それは、平和というテーマと直接かかわっていくのである。ウェイド氏という。「お互いに理解できないということを理解しようという相互理解もある」と。これは使い古された決まり文句で、あたりまえのことかもしれないが、「音楽の知そして平和」という講演にとってはとても重要な言葉だったと思う。

素朴で単純かもしれないが、異文化にふれて、その音楽の形を理解するだけでなく、込められた「意味」を理解することは、平和への唯一の道であると信じるしかあるまい。そのようなことを、うったえる、有意義な講演であった。

講演では、いくつものすばらしい音源と映像がながされた。スタッフの協力のたまものである。また、当日の観客のみなさんに対しても、ウェイド氏にかわって、感謝申し上げたい。

(藤田隆則)

#### ◆公演「黄檗の声明（梵唄）」

日時：2006年10月7日（土）15:40～17:00

場所：京都市立芸術大学講堂

出演：大本山黄檗山萬福寺（15名）

解説：澤田篤子（洗足学園音楽大学教授）、

荒木将旭（黄檗山萬福寺教学部長）

司会：後藤静夫（日本伝統音楽研究センター教授）

参加者数：約350名

京都国際会議2006のセッションのひとつとして、黄檗山萬福寺の声明（梵唄）の公演を行った。

禅の一派である黄檗宗は、中国大陸で明王朝が滅亡した直後、在日華僑たちや幕府の強い要請を受けた隠元が高齢を押し請来した。当時の日本は徳川四代将軍家綱の時代で、幕政も安定し平和と繁栄を達成していた。隠元はみずから「黄檗清規」を制定し宗務の一切を故地・明の様式で行うことを義務付けた。また、歴代十数人の住持が中国より招かれた事もあり、中国では失われてしまった明代の声明の様相を色濃く残す発音・所作が、日本の黄檗宗で連綿と今に伝えられたのである。平和のもたらした偉大な財産であろう。

今回、大本山萬福寺の全面的なご協力を得て、「祝聖儀朝課」を上演する事ができた。

開演に先立ち、洗足学園音楽大学 澤田篤子氏、黄檗山萬福寺教学部長 荒木将旭師による解説が行われ、参加者の理解を深めた。

堂内に見立てた講堂には、達磨像を前に萬福寺より運搬された香灯（ひゃんでん）・木魚・銅鑼・引鑿・鑿子が整然と並び、暗黒の中雲水の打つ巡照板の力強い音で開始された。

独特のリズミカルな鳴り物と共に、鍛え抜かれた音声ホールに響き渡り参加者を圧倒、一挙に黄檗禅の世界に引き込んで行った。

巡照一出頭半鐘に続いては、拝太鼓—三通木魚—朔望祝聖儀—聖無量寿決定光明王陀羅尼—疎—千手千眼無礙大悲陀羅尼—般若波羅密多心經—中太鼓—四聖風經—祝韋駄儀—祝伽藍儀—禮佛發願文—清晨普願偈—三婦依文と快い緩急の間を刻みながら滞りなく進行し、展具三拜—拝班で一同拝礼し肅々と退場し終了した。

参加者は静かな興奮に包まれ、なおしばらく余韻に浸っていたように見受けられた。

その後行われた学会の懇親会でもひとしきり話題となり、一般参加の方のアンケートの結果とも合わせ、大方の好評が得られたと思われる。

秋の行事多忙の折、声明の練達者を選抜し、さまざまな制約の中多大な成果を上げ、京都国際会議2006を意義有らしめていただいた大本山黄檗山萬福寺はじめ

関係者皆様に心より感謝いたします。

(後藤静夫)



## 事業紹介

## 「伝音セミナー」で種をまく

藤田 隆則

「日本伝統音楽研究センター」という名称は、とても長い。学内においては、「伝音（でんおん）」という通称が行なわれてきた。せっかくだいて広まっている通称を、利用しない手はあるまい。そこで、催しの名前は、「伝音セミナー」と決定した。

もちろん、先に名前が決まっていたわけではないのである。「伝音セミナー」立ち上げの経緯は次のとおりだ。

これまで、伝音において、一般的な市民に向けての公開事業としておこなわれてきたのは、公開講座が主であった。しかし、この公開講座は、規模も大きく、また、多数の観客を想定した催しであるため、ひんぱんに開催することはできない。もっと機動力のある、より小さな規模の市民向けセミナー開催の必要性が、認識されていた。

また、本センターには、日本の伝統音楽を中心とした、貴重な音源資料が存在している。とくに、田邊コレクションの一部として存在している SP レコードの中には、全国的にみても貴重であるといえる音源も少なくない。その整理作業およびデジタル化は、委託研究員の亀村正章氏を中心にして、ちゃくちゃくと進みつつある。とすれば、これをなんらかのかたちで公開していくことはできないか。

そしてさらに、公開もさることながら、われわれ伝音の研究員やスタッフ自身が、音源を、集中的に耳にする機会を、同時にもうけることはできないものか。

以上のような背景で、18 年度から「伝音セミナー」を、定期的におこなうことが決定した。18 年度、全体の題として掲げたのは、「大正から昭和初期の日本伝統音楽 SP レコードを聴く（古代、中世、近世の日本伝統音楽）」である。毎月、センターの研究員がひとりずつナビゲーターとして、音源を紹介するという試みである。亀村正章氏には、毎回、音源の準備などでお世話になっている。

各回の参加定員は、30 名とした。実際に集まってこられた人数は、30 名から 15 名の間である。伝音センターの合同研究室をつかって行なわれるため、もとより大人数を想定していない。したがって、定員を 30 名と設定したのである。

さらに、30 名には、きちんとした背景がある。それは、ひとつの会場で、マイクなどの拡声器をつかわずに、話をできる人数の上限が、ほぼ 30 名であろうという認識である。古い音源をきいて、意見を口にしようのに、30 名というのは、もっとも適切な規模である。

以下に、18 年度の日程と、担当者を列挙しておく。

会場：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター合同研究室 1

時間：原則として第 1 木曜日 午後 2 時  
— 4 時

参加費：無料

定員：先着30名

第1回 6月1日(木)午後2時～4時  
「古曲保存会レコード その1」

ナビゲーター：竹内有一(伝音センター助教授)

内容：大正9年に完成したレコード集に耳を傾けます。今回は、江戸の浄瑠璃など三味線音楽が多く含まれています。盤の状態がよければ、オリジナルのSP盤を古い蓄音機で再生します。

第2回 7月6日(木)午後2時～4時  
「国際文化振興会レコード(KBS) その1」

ナビゲーター：田井竜一(伝音センター助教授)

内容：昭和18～19年に制作された「日本音楽集」の中から、民俗芸能および民謡関連の録音をききます。また、祇園祭りの時期ですので、最初期の祇園囃子の録音もご披露します。

第3回 8月3日(木)午後2時～4時  
「国際文化振興会レコード(KBS) その2」

ナビゲーター：藤田隆則(伝音センター助教授)

内容：昭和18～19年に制作された「日本音楽集」の中から、声明および能・狂言の録音をききます。喜多六平

太(初世)、宝生新ら名人の謡と、現代の録音との比較も試みたいと思います。また、余裕があれば、楽譜(声明譜や謡本)と録音の対照もおこないます。

第4回 9月7日(木)午後2時～4時  
「語り物の流れ」

ナビゲーター：後藤静夫(伝音センター教授)

内容：第三回セミナーを受けて、仏教音楽から語り物への流れをたどってみる。義太夫節を中心とするが、地歌等其他の邦楽との影響関係も古曲保存会レコード等で聞き比べます。

第5回 10月12日(木)午後2時～4時  
「SPレコードによる邦楽の流れ」

ナビゲーター：横山佳世子(伝音センター特別研究員)

内容：宮城道雄氏の演奏による地歌・箏曲の録音を中心に聴きます。現代の録音との比較も行います。

第6回 11月2日(木)午後2時～4時  
「和洋折衷の音楽：和洋合奏」

ナビゲーター：奥中康人(伝音センター特別研究員)

内容：現在では聞きなれないコトバですが、SPレコードの世界には「和洋合



奏」というジャンルが存在します。文字どおり、「和」と「洋」が混ざった折衷式のアンサンブルで、今日では、どちらかといえばキワモノ扱いされかねません。しかし、録音は比較的多く残っています。そこで第6回目は、例えば有名な《勸進帳》で、普通の長唄演奏と和洋合奏とを比較してみるようなおもしろい企画を考えています。また、秋ですので、時代祭でおなじみの山国隊の鼓笛隊（これも和洋折衷！）の貴重な録音も紹介する予定です。

第7回 12月7日（木）午後2時～4時

「日本音楽」と「日本伝統音楽」

ナビゲーター：吉川周平（伝音センター所長）

内容：日本伝統音楽研究センター所蔵のSPレコードは、現代につながる古い時代の演奏を知るための貴重な録音である。私個人が日本の芸術的な音楽を聞くようになったのは、昭和24年からであるが、それから現在まででも日本伝統音楽は大いに変化しているように感じられる。このようなことは、純粋な表現である音楽よりも、時代の変化からとり残されがちな「身体」による表現の舞踊を考えるとわかりやすい。私の場合、時代にとり残されたような民間伝承にまで考察の対象を拡大して、舞踊学に資する成果も得られた。そこで、はじめて当センター所蔵のレコードによって、今とは異なる「日本音楽」演奏の音について考え、次に現在伝承されている民俗音楽を材料に加

えて、「日本伝統音楽」の資料が、音楽とは何かを考えるのに役立つものがあるかどうか検討してみたい。

第8回 2007年 1月11日（木）午後2時～4時 「声を使った芸を聞く」

ナビゲーター：龍城千与枝（伝音センター特別研究員）

内容：明治期の歌舞伎・音曲界では、声をつかった芸の評価に「美音」「美声」「息遣いのよさ」などの基準をあげています。これらの評価は一体何を基準としたものなのでしょうか。常磐津節の『山姥』は、一般的にはあまりなじみのない曲ですが、素浄瑠璃の演奏では、「常磐津らしさ」満載の作品として、比較的頻繁に演奏されます。今回は、『山姥』を中心に、明治・大正・昭和と時代を超えて変化する演奏者の個性を聞き比べながら、明治期の日本音楽の評価が、一体何に注目したものだったのか、様々な「声」を聞きながらたどってみたいと思います。

第9回 2月1日（木）午後2時～4時

「富崎春昇の至芸を聴く」

ナビゲーター：久保田敏子（伝音センター教授）

内容：前回の「声を使った芸を聞く」を受けて、地歌箏曲界で名人と謳われた盲目の音楽家・富崎春昇の至芸を聴きます。当センターにあるSP音盤と、別途入手した音源の中から、地歌三弦での弾き歌いで、三味線組歌破手組「京鹿子」、手ほどきもの「海老」、端歌

もの「閨の文」、謡曲もの「八島」を、  
箏曲の弾き歌いで、箏組歌「菜菔」、古  
今組「千鳥の曲」、地歌の語りものとも  
いえる繁太夫物の「橋づくし」（『心中  
天網島』）、作物「寛闊一休」、「都十二  
月」などから適宜選んで聞き、名人の  
傍に迫り、その魅力を探ります。

なお、各回の案内、内容の紹介、内容  
の報告は、伝音のホームページを利用し  
ておこなわれた。反省点としては、ホー  
ムページだけでは、催しの案内としては、  
周知が行き届かなかったという点があげ  
られる。来年度は、ホームページでの案  
内の他に、チラシなどを作成し、案内を  
徹底したいと考えている。

扱う音源の性質上、あまりたくさん  
の市民の関心をひくことはないのは事実  
である。しかし、SPに残された明治、大正、  
昭和初期の音源が、たいへん貴重なもの  
であり、また、それがたんに音源だけひ  
とりで聞いてみたとしても、容易に了解  
できるものでもないということも、確か  
なことである。

埋もれている音源を、第一木曜日の午  
後の二時間、集まった市民や学生の前で  
公開し、研究員もそれとともに聞き、担  
当の研究員が必要最小限の、的確なコメ  
ントを付与していくという、そういった  
ささやかな催しをつづけることには、伝  
統音楽の将来に対する、欠くことのでき  
ない種まき行為である。そして、その種  
まき行為こそ、「種」という語源をもつ  
「セミナー」という言葉に、もっともふさ  
わしい内容であると考えられる。

## センターニュース

平成 18 (2006) 年度

## 人事・採用及び異動発令

◇平成 18 年 4 月 1 日

所長 吉川周平 (再任)

非常勤講師 (特別研究員) 奥中康人  
(新規採用)非常勤講師 (特別研究員) 小野真  
(継続採用)非常勤講師 (特別研究員) 龍城千与枝  
(新規採用)非常勤講師 (特別研究員) 横山佳世子  
(新規採用)非常勤講師 (情報管理員) 東正子  
(継続採用)非常勤嘱託員 (学芸員) 齊藤尚  
(新規採用)非常勤嘱託員 (研究補助員) 池内美絵  
(継続採用)非常勤嘱託員 (研究補助員) 小城篤子  
(新規採用)非常勤嘱託員 (研究補助員) 末松憲子  
(新規採用)

事務室担当係長 田中将雄 (転入)

◇平成 18 年 5 月 1 日

事務室係員 岩城恵 (転入)

◇平成 18 年 4 月 30 日

事務室係員 才田典子 (転出)

◇平成 19 年 3 月 31 日

非常勤講師 (特別研究員) 小野真  
(任期満了)非常勤嘱託員 (研究補助員) 池内美絵  
(任期満了)

## 出版物

## &lt;学術刊行物&gt;

## ◆『日本伝統音楽研究』第 4 号 日本伝統音楽研究センター研究紀要

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター編集・発行、2007 年 3 月 30 日、B5 1 段横組 154pp.

内容：◇論文 小野真「Buddhistisch-musikalische Konzepte in Sutren und deren Verwirklichung im Hōe (法会) 仏典における仏教-音楽的コンセプトと法会におけるその現実化」、後藤静夫「衰退する特定集団語—文楽の隠語 = 「せんぼう」の現在—」

◇研究ノート 龍城千与枝「口三味線の表す「ぬいろ」の聞こえ方」、森田柊山「都山流の系譜を探る—中尾都山が修行時代に習った師匠—」

◇調査報告 田井竜一「京都祇園祭り 南観音山の囃子」

◇記録：所長対談「小島先生にきく日本伝統音楽の研究と教育—継承と発展を視点として—」、小島美子・吉川周平 (聞き手)

## &lt;広報誌等&gt;

◆『京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 所報』第 8 号、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター編集・発行、2007 年 3 月 30 日、A5 62pp.

◆『京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 概要 2006』、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター発行、B4 変形観音折 (所報第 8 号の巻末に書式を改めて再録)

◆ Research Centre for Japanese Traditional

Music, Kyoto City University of Arts, 2006 (上記概要の英語版)、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター発行、B4変形観音折 (所報8号の巻末に書式を改めて再録)

◆『2006京都市立芸術大学 概要』、京都市立芸術大学発行、2006年、57pp. (伝音センター記事 pp.43-45)

◆Kyoto City University of Arts (大学概要英語版)、京都市立芸術大学発行、2006年、21pp. (伝音センター記事 pp.15-16)

◆『京都国際会議2006 芸術がデザインする平和のかたち』(パンフレット)、京都国際会議200開催委員会・京都市立芸術大学発行、2006年10月、16pp. (伝音センター記事 pp.8-9)

## 一般公開事業

### <公開講座>

#### ◆平成18年度第1回公開講座

「じょうり西・東一義太夫節と常磐津節」

日時：平成18年11月15日(水)午後2時～4時

場所：府民ホールアルティ

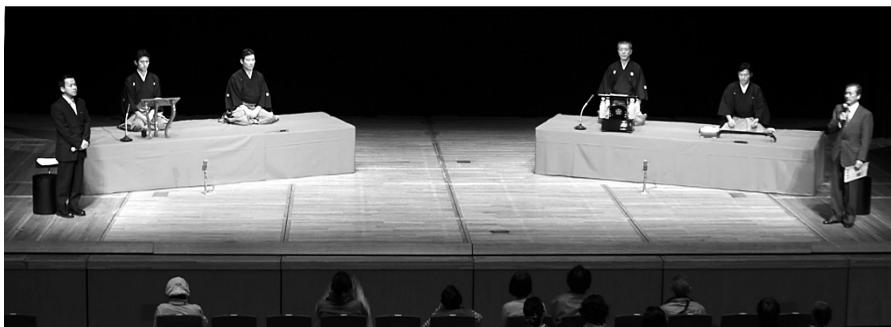
解説・司会：後藤静夫・竹内有一  
演奏：竹本津国大夫・竹澤団吾、常磐津都代太夫・常磐津綱男

受講料無料、受講者数：約210名

主旨：日本の伝統音楽の中で「語り物」は重要な位置を占めている。語り物の代表である浄瑠璃は、演奏のみでなく演劇とも結びついて、多くの特徴ある流派を生み出し発展してきた。人形と提携した「義太夫節」と歌舞伎と結びついた「常磐津節」は、それぞれ大阪、江戸で愛好され、現在まで伝えられてきた。江戸・大阪という土地柄、人形芝居と歌舞伎舞踊というそれぞれの違いが、戯曲的・音楽的にどのような特徴を生み出し育んだのか、実演を通して探るとともに、東西の浄瑠璃の魅力や本質に迫る。

内容：

- 一 概説「浄瑠璃の歴史と特色」
- 二 演奏と解説「義太夫節と常磐津節の比較」
  1. 「妹背山道行」による比較—義太夫から常磐津へ—
  2. 三味線をめぐって—構造と特徴—
  3. 「戻橋」による比較—常磐津から



義太夫へ—

### 三 演奏

1. 常磐津節「積恋雪関扉」より「生酔」
2. 義太夫節「仮名手本忠臣蔵」より「裏門」

### 四 まとめ

報告：義太夫節と常磐津節、それぞれの実演者に関わりながら仕事をしてきた後藤・竹内の立場を生かした企画。人形浄瑠璃と歌舞伎、あるいは関西と関東という「比較」を軸にして、演目と提示部分を選定し、通常の演奏会や他の企画ではみられないような切り口を目指した。実演者の理解と協力を得て、実演者ならではの芸談も引きだした。60歳代の受講者が多く、また、アンケートの回収率が非常に高かった。

(竹内有一)

### ◆平成 18 年度第 2 回公開講座

「仏教と雅楽—「法会」に触れてみる—」

日時：平成 18 年 12 月 20 日（水）午後  
2 時 40 分～4 時 10 分

場所：京都市立芸術大学講堂

講演・進行：小野真（日本伝統音楽研究センター特別研究員）

出演者：多治見真篤、吉田智正、林絹

代、深田敏弘、藤溪英純

協力：四天王寺

司会：藤田隆則

受講料無料、受講者数：約 190 名

内容：(1) 講演「いかに仏教は音楽と結びつきうるのか—経典に見られる仏教音楽のコンセプトとその受肉としての法会」 講演：小野真、(2) ワークショップ「法会に触れてみる」

趣旨：雅楽といえば、一般に神社や皇室行事でのみ奏されると考えられているようであるが、雅楽は古来より仏教と強く結びついてきた。寺院は現在でも雅楽・舞楽が奏される重要な舞台の一つであり続けている。この講座では、仏教と音楽の結合を支える様々な位相を、文献に基づいて分析したうえで、それらが生きた法要にどのように実現されているかを、聖霊会舞楽大法要を例にとり、実際の法要の映像をみてもらいながら提示することを試みる。

後半のワークショップでは、聴衆から希望者を募って、四箇法要を再現し、声明・雅楽がいかに相まって仏世界との通路を開くかを実演・体感してもらおう。

報告：前半は仏教と音楽の結びつきをテーマとした講演を行った。まず聖



霊会舞樂大法要のDVDを上映し、実際に仏教と音楽（声明・雅楽）が結びついている生きた姿を見てもらった。そのうえで、仏典を引用しつつ、基本的に仏教が音楽に対して警戒的であったことを確認し、さらにどのような場合において仏教が音楽との結びつきを認容してきたかを検証した。とりわけ大乘仏教の『大樹緊那羅王所問經』において、悟りに導くために音楽を用いることが積極的に説かれていることを紹介した。こうして、仏典に基づく仏教と音楽の結合の諸構想を確認したうえで、それら諸構想がどのように法会の中に現実化されているかを聖霊会舞樂大法要を例にとり分析した。

後半は、聖霊会の参加経験のある楽人5名と出口隆順執事をはじめとする3名の四天王寺の僧侶の協力を得て、あらかじめ作製していた聖霊会の短縮版の差定と声明譜に基づいて、講堂舞台上でミニ聖霊会を再現した。学生5名にも参加してもらい僧侶役をやらしてもらった。その際、雅楽と声明がいかに重なり合い、また雅楽がいかに僧侶の所作や声明の進行を導いているかということを中心に解説をした。

今回は、講演と実演の二本立てであったので、できるだけ簡明に理解してもらおうことを心がけた。が、所与の時間に対して若干内容が濃かったようにも思われる。もう少し時間があれば、講演と実演ともどももっと落ち着いて詳しく説明できた憾みがある。もっとも、アンケートなどの結果をみるに、おおむね興味深く

聴いていただいたようである。聴衆は各層にまたがっていたが、基本的に法会など仏教の行事に強い関心をもっておられる方が多かったと思う。それゆえ講演後の質問にかなりつまんだものが多くあった。

(小野真)

#### ◆平成18年度第3回公開講座

##### 「地歌箏曲の楽しみ」

日時：平成19年3月17日（土）

（詳細は次号に掲載します）

#### <伝音セミナー>

本年度より、「伝音セミナー」という名称で、連続講座を開催することとなった。詳細は本号24ページをご覧ください。

#### <京都国際会議2006>

2006年10月上旬に、本学美術学部・音楽学部・伝音センターの共同による「京都国際会議2006」が、同開催委員会によって開催された。伝音センター主催セッションの詳細は本号18ページをご覧ください。

#### <外部閲覧者の状況>

本センターでは、2005年4月より、学術・研究を目的とした利用にかぎり、可能な範囲で収蔵資料の閲覧をうけつけている。2006年度は、利用の方法を利用者にとってより便利な形にあらためたこともあり、2005年度にくらべて多くの利用者があった。その内訳は以下の通りである（集計期間は、2006年4月1日～12月20日）。

種 別	人数
共同研究員	2
本学学生	6
研究者（他大学教員等）	2
他大学学生	2
一 般	4
合 計	16

「共同研究員」は、書類申請の数字で見ると少ないが、実際には専任教員との提携による共同研究活動の中で、相当数の閲覧が行われており、同様に、専任教員との提携や依頼によって研究を進める外部利用者も、この数字にあらわれていない事例が少なくないと思われる。また「本学学生」には、本センター教員が担当している本学音楽学部の講義「日本音楽史」において、日本音楽に関する資料および本センターにしたしんでもらう目的で、受講生に課している、「日本伝統音楽研究センター資料室利用体験レポート」のために利用した受講生もふくまれている。

2005年度よりは沢山の利用者があったとはいえ、本センターの役割や資料の収集状況からすれば、その数はまだまだ少ないといわざるをえない。今後は、閲覧利用の周知を一層すすめると共に、多くの利用者から要望の強い、複写サービスの早急の実施を検討する必要がある。

(田井竜一)

### <インターネット>

昨年度まで「データベース」と称していた Web ページの見出しを、「伝音アーカイブズ」に改称し、電子媒体上のさまざまなデータをここに集約して

掲示することにした。今年度の新規掲載アーカイブは、藤田隆則「能の地拍子研究文献目録」、田井竜一「祇園囃子アーカイブズ」である。来年度は新たなアーカイブの計画・作成・公開をさらに進めていく予定である。また、最新の広報記事を「センターニュース」欄に随時わかりやすく掲出して、一層の広報効果が得られるように工夫した。

(竹内有一)

### 資料の受け入れ

平成 18 年度の資料の新規受け入れに関わる業務は、例年通り順調に進められた。今年度（12 月まで）の新規登録資料は、書籍が約 1900 点、音源資料が約 1300 点であった。

資料の寄贈については、立木幸江氏から貴重な柳川流三味線 2 挺他、SP レコード等の音源資料を、井澤英夫、川向勝祥（故人）、中井猛、西脇康孝、野入省吾、藤井知昭ほかの諸氏からご寄贈いただいた。本年度は音源資料の寄贈が目立った。書籍類も引き続き多数ご寄贈いただいております。いずれの資料も、整理と登録が整い次第、収蔵データベースで公開し、外部閲覧利用に供している。寄贈者すべてのお名前を掲出することはできないが、この場を借りて、心より御礼申し上げます。なお、近年は重複する資料が多くなり、収蔵スペースも限られているため、センターの研究用途に照らして有用な資料のみを寄贈いただいている。

(齊藤尚・竹内有一)

## プロジェクト研究・共同研究の報告

平成18(2006)年度

### <プロジェクト研究>

#### ◆「日本近代における音楽・芸能の再検討」

研究代表者：後藤静夫

共同研究員：今田健太郎（日本学術振興会特別研究員）、岩井茂樹（国際日本文化研究センター研究部技術補佐員）、上田学（立命館大学大学院）、奥中康人（本学特別研究員）、川村清志（札幌大学助教授）、澤井万七美（沖縄工業専門学校助教授）、竹内有一、龍城千与枝（本学特別研究員）、寺田詩麻（早稲田大学非常勤講師）、寺田真由美（神戸大学大学院）、土居郁雄（国立文楽劇場）、廣井榮子（京都造形芸術大学講師）、細田明宏（別府大学専任講師）、真鍋昌賢（大阪大学助手）、横田洋（大阪大学大学院）

2年目を迎え、新しいメンバーも加わりそれに伴って研究対象ジャンル・時期等も拡大した。初年度の活動を通してメンバーの共通認識も深まり、各回の発表後の討論も多角的かつ掘り下げられたものになった。また「日露戦争期」「観客」「伝承」「地域特性」等のサブテーマが浮かび上がってきている。

平成17年度補遺

\*第9回研究会（於 別府大学等）

2006.02.11～12（土・日） 特別講演：奥野久美子（別府大学専任講師）

「芥川龍之介『鼠小僧次郎吉』：講談本からの影響と林和による受容について」（別府大学）、調査：近代舌耕芸の先駆的事例としての「亀の井バス地獄巡りバスガイド」、特別講演：古門孝之（北原人形芝居 挟み遣い人形遣い）「北原人形芝居；挟み遣いの復元実演と解説」（聴潮閣）

\*第10回研究会

2006.02.25（土） プレゼン：土居郁雄「寄席囃子発達史」、発表：上田学「日露戦争期の京都と映画観客」

\*第11回研究会

2006.03.11（土） ゲストスピーカー：神山彰（明治大学教授）「沈黙と独白—明治期の表現の特質」

平成18年度

\*第1回研究会

2006.05.20（土） プレゼン：澤井万七美「近代山口県における教育と演劇」、発表：真鍋昌賢「浪花節の改良と芸術化への意志—1920年代における志賀志那人と宮川松安の実践」

\*第2回研究会

2006.06.24（土） プレゼン：今田健太郎・竹内有一「絵解きとその研究の現状」、発表：岩井茂樹「『日本的』美的概念の成立—<能＝「幽玄」><茶の湯＝「わび」「さび」>

\*第3回研究会

2006.07.15（土） プレゼン：真鍋昌賢「アナウンサーの言葉、DJの言葉—「二次的な声の文化」とイントネーション」、発表：寺田真由美「明治期以降の東京における音曲師の活動とその伝承—家元制度外の三味線小歌曲の伝承のあり方」

## \* 第4回研究会

2006.09.02 (土) 職員会館かもがわ  
 ワークショップ：セッション1「複製」、  
 発表1：真鍋昌賢「芸能史の近代を論  
 じるために」、発表2：奥中康人「五線  
 譜というメディア」、発表3：上田学  
 「映画『紅葉狩』における複製の歴史性」、  
 発表4：細田明宏「民俗芸能における  
 伝承と複製技術—地方人形座が『文楽  
 のビデオ』から学ぶもの」、セッション  
 2「お囃子」、発表1：今田健太郎『お  
 囃子』試論」、発表2：龍城千与枝「望  
 月太意之助と田中傳左衛門の歌舞伎音  
 楽観比較—下座音楽における音の象徴  
 性と機能性を中心に」、発表3：土田牧  
 子(ゲスト)「活歴における陰囃子演出  
 一世話狂言、義太夫狂言との比較」、  
 発表4：土居郁雄「お囃子さんという演  
 者について」

2006.09.03 (日) 京都大学地球環境学  
 堂三才学林

発表：川村清志「折口信夫のくもど  
 き>における再帰性と非対称性」

## \* 第5回研究会

2006.10.14 (土) プレゼン：土居郁雄  
 「足引清八の芸態等について」、発表：  
 寺田詩麻「明治前期の東京における劇  
 場の移転と建設」

## \* 第6回研究会

2006.11.19 (日) プレゼン：上田学  
 「汽車活動写真館考—明治四〇年代にお  
 ける映画の受容空間」、発表：奥中康人  
 「歌舞伎座における和洋合奏『道成  
 寺』：北村季晴の音楽改良の試み」

## \* 第7回研究会

2006.12.23 (土・祝) 発表：横田洋  
 「中村歌扇から山崎長之輔へ—連鎖劇の  
 上演形態とその変容」、発表：細田明宏

「浄瑠璃『壺坂霊験記』における音曲改  
 良」

## ◆ 「教育現場における日本音楽」

研究代表者：藤田隆則

共同研究員：井口はる菜（滋賀大学非常  
 勤講師）、伊野義博（新潟大学教授）、  
 今田健太郎（学振特別研究員）、小塩  
 さとみ（宮城教育大学助教授）、加藤  
 富美子（東京学芸大学教授・附属幼  
 稚園長）、久保田敏子、薦田治子（武  
 蔵野音楽大学教授）、澤田篤子（洗足  
 学園音楽大学教授）、田井竜一、竹内  
 有一、塚原康子（東京芸術大学助教  
 授）、月溪恒子（大阪芸術大学教授）、  
 永原恵三（お茶の水女子大学教授）、  
 樋口昭（創造学園大学教授）、水野信  
 男（兵庫教育大学名誉教授）、茂手木  
 潔子（上越教育大学教授）、山口修  
 （大阪大学名誉教授）

教育指導要領の改訂などに伴い、現  
 在、小学校、中学校、高等学校の教育  
 現場では、日本音楽の導入に関する  
 様々な試みが行なわれている。そうし  
 た中、適切な日本音楽史の概説書がな  
 いという声現場から多くとどいてい  
 る。一方、大学教育においても、実は  
 状況は同じであるといえよう。

本プロジェクト研究は、こうした教  
 育現場の声に答えるべく、音楽学・音  
 楽教育学の各分野の専門家が共同して、  
 従来の日本音楽に関する概説書を検証  
 し、また現場における取り組みを参照  
 しつつ、教育現場においてどの様な内  
 容のものが必要とされるのかをまず検  
 討する。そして、最終的には、最新の  
 研究成果をふまえつつ、現場で使いや

すい内容の概説書を作成し、それを学界から教育現場に発信することを目的とする。

平成16年に発足したこのプロジェクト研究は、平成17年度までは、久保田敏子の主催でおこなわれてきたが、平成18年度は、藤田隆則が引き継いだ。

平成18年度も、同じ趣旨にしたがって、年度末までに計6回の研究会を実施した。現在は、新たな概説書の出版にむけて、最終的な検討をおこなっているところである。

### ＜共同研究＞

#### ◆「演奏研究—地歌・箏曲—」

研究代表者：久保田敏子

共同研究員：井口はる菜・中井猛・野川美穂子、(実演家)伊藤志野・岡村慎太郎・小川雄司・奥田智之・奥村智子・片岡リサ・笠原洋子・川村晃子・西川かをり・福田千栄子・三上律子・横山佳世子

地歌・箏曲のうち、特に「古典曲」と称される作品の伝承については、流派・芸系によって異同がある。この研究会では、代表的なジャンルとその作品を幾つか取り上げて、歌本類の詞章との異同や、手や寸法、曲の運びの相違、さらには、手法や替手、演出の相違等、互いに発表しあうことにより、流派芸系による伝承の違いを検証する。

研究員は、研究者と、古典伝承の将来に期待できる各派の若手演奏家を中心として、技巧優先の現代邦楽にのみ走りがちな近年の演奏家の「古典曲」に対する意識を高め、流派・芸系によ

る伝承の違いを知り、ひいては流派芸系を越えて互いに理解を深めることを目的とする。なお、この研究会は原則として公開とし、レクチャー・コンサートをまとめとして、一般の理解をも深めることを目指す。

### 2006年

- 5月20日：段物～その成立と変遷～
- 6月18日：砵物とその諸態
- 7月23日：晒物・長歌物とその発展
- 8月26日：謡物とその攝取法
- 9月24日：芝居歌物とその実態
- 10月14日：端歌物～その楽しみ方  
諸態～
- 12月23日：獅子物と手事物

### 2007年

- 2月17日：作物と座興の楽しみ
- 3月17日：公開講座(レクチャー・コンサート)、於：京都  
芸術センター大広間

#### ◆「祇園囃子の源流に関する研究」

研究代表者：田井竜一(センター助教授・民族音楽学)

共同研究員：安達啓子(日本女子大学教授・美術史)、入江宣子(仁愛女子短期大学非常勤講師・民俗音楽学)、岩井正浩(神戸大学教授・音楽学)、植木行宣(元京都学園大学教授・日本芸能文化史)、垣東敏博(福井県立若狭歴史民俗資料館学芸員・民俗学)、後藤静夫(センター教授・芸能史)、土居郁雄(国立文楽劇場・芸能史)、永原恵三(お茶の水女子大学教授・附属幼稚園長・音楽学)、西岡陽子(大阪芸術大学教授・民俗学)、樋口昭(創造学園大学教授・日本音楽

史)、福原敏男(日本女子大学教授・歴史民俗学)、増田雄(歴史学)、米田実(甲賀市役所市史編纂係・民俗学)

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターで実施された、共同研究「山車囃子の諸相」(2000年度)・「ダシの祭り」と囃子の諸相」(2001-2002年度)においてつみのこした課題をひきつぎながら、京都の祇園囃子の成立と展開の過程に焦点をあてて設定されたのが、本共同研究である。「風流拍子物」「稚児の羯鼓舞と獅子舞を主体とする山鉦の囃子」「シャギリ」の各諸相を大きな柱として、祇園囃子の源流に関する諸問題について、様々な角度からの考察・議論をおこなった。

今年度を実施した共同研究会は、以下の通りである(場所は特記しない限り、いずれも京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター合同研究室2および1)。

#### \*第1回研究会

2006年5月13日(土)、テーマ「北陸地方の山・鉦・屋台の祭りと囃子の諸相」、(1)等覚寺の松会、川名津の柱松神事に関する映像記録の上映、(2)入江宣子「練馬の鶴舞と大磯の鷺舞についての報告」、(3)小境卓治氏(氷見市立博物館館長補佐、ゲストスピーカー)「越中の曳山と氷見の曳山」、(4)総合討論

※オプション企画として、5月12日(金)に京都市立芸術大学資料館において、「年中行事絵巻(模本)」を熟覧

#### \*第2回研究会

2006年6月10日(土)、テーマ「稚児の羯鼓舞と獅子舞の諸相 その5:津島祭礼の諸相」、(1)福岡市の松囃子の映像記録上映、(2)福原敏男「津島祭・三之丸天王社祭礼・真清田社桃花祭における羯鼓舞稚児舞」、(3)津島祭礼の映像記録上映、(4)笹原亮二氏(国立民族学博物館助教授、ゲストスピーカー)「折口信夫の造形伝承論―「髭籠の話」・「盆踊りと祭屋台」を読む―」、コメンテーター:植木行宣、(5)総合討論

※オプション企画として、6月9日(金)に京都市立芸術大学資料館において、「年中行事絵巻(模本)」および「職人歌合(模本)」を熟覧

#### \*第3回研究会

2006年7月1日(土)、テーマ「稚児の羯鼓舞と獅子舞の諸相 その6:岐阜の稚児の羯鼓舞と獅子舞」、(1)音成の面浮立の映像記録上映、(2)西岡陽子「御嵩薬師祭礼における山の芸能とその周辺」、コメンテーター:樋口昭・福原敏男、(3)田井竜一「大矢田祭礼における大山・車楽の芸能」、(4)総合討論

#### \*第4回研究会

2006年9月16日(土)、テーマ「シャギリの諸相 その6:二本松祭礼の囃子とシャギリ」、(1)彌彦神社の燈籠神事・神歌楽・天犬舞および長屋祭り・神測祭りの羯鼓舞稚児舞と獅子舞の映像記録上映、(2)竹下英二氏(福島大学人間発達文化学類教授、ゲストスピーカー)「二本松祭礼の囃子とシャギリ」、(3)総合討論

#### \*第5回研究会

2006年10月28日(土)、テーマ:

「図像にきく『祇園囃子』 その1：洛中洛外図と祇園祭礼図の系譜と特質」、(1) 両岩の小浮立の映像記録上映、(2) 安達啓子「洛中洛外図の系譜と特質(洛中洛外図屏風を中心に)」、(3) 八反裕太郎氏(京都大学大学院、ゲストスピーカー)「祇園祭礼図の展開と特質」、(4) 総合討論

※第6回研究会

2006年11月18日(土)、テーマ：「図像にきく『祇園囃子』 その2：山鉦の変遷と『祇園囃子』の展開」、(1) 荒尾の風流の映像記録上映、(2) 植木行宣「図像にみる祇園祭山鉦とその変遷」、(3) 田井竜一「図像にきく『祇園囃子』」、(4) 発表に対するコメント：安達啓子、八反裕太郎氏、(5) 総合討論

※第7回研究会

2006年12月16日(土)、テーマ：「総括討論：風流拍子物・羯鼓稚児舞・シャギリの囃子」、(1) 田井竜一「総括討論：風流拍子物・羯鼓稚児舞・シャギリの囃子」、(2) 樋口昭「羯鼓稚児・獅子を含む民俗芸能にみる音楽的概観」、(3) 総合討論

※オプション企画として、12月15日(金)に國學院大学神道資料館において、「祇園祭礼絵巻」および「月次風俗図屏風」を熟覧

◆「詞章本とその出版に関する研究」

研究代表者：竹内有一

共同研究員：井口はる菜(滋賀大学非常勤講師)、小野恭靖(大阪教育大学教授)、久保田敏子、後藤静夫、竹内道敬(元国立音楽大学教授)、龍城千与枝(早稲田大学大学院博士後期課

程)、谷垣内和子(東京芸術大学非常勤講師)、配川美加(東京芸術大学非常勤講師)、松岡亮(立命館大学COE推進機構客員研究員)、山崎泉(日本大学非常勤講師)、山根陸宏(天理大学附属天理図書館司書)、吉野雪子(国立音楽大学非常勤講師)、渡邊浩子(大阪音楽大学非常勤講師)

2005年度のコネクトと目的(所報第7号参照)を踏襲し、引き続き、各論的な研究発表を通じて、各分野を横断的に眺めるための考察を重ねた。来年度は研究成果のアウトプットを視野に入れた活動を中心に進める予定である。各回の詳細な報告と考察はwebに掲載し、以下では簡略な概要のみを記した。なお、司会・進行は特筆なき場合、研究代表者が行った。

※第1回研究会

2006年6月10日(土)13:30-17:00、日本伝統音楽研究センター合同研究室1、テーマ「江戸期歌謡の出版をめぐる」、(1) 研究発表：小野恭靖「教化の歌謡—出版・絵画・流行歌謡—」、(2) 自由討論(コメンテーター：久保田敏子)、(3) 研究短信「昨年度の研究活動について」(全員)

※第2回研究会

2006年7月30日(日)13:30-17:00、伝音センター合同研究室2、テーマ「宮古路・豊後系浄瑠璃の詞章本出版その1」、(1) 研究発表1：根岸正海(ゲストスピーカー、国立音楽大学非常勤講師)「宮古路節の研究と正本」、(2) 自由討論1、(3) 研究発表2：竹内道敬「新内『明烏』の成立ほか」、(4) 自

由討論 2

\* 第 3 回研究会

2006 年 9 月 3 日 (日) 13:30-17:00、伝音センター合同研究室 2、テーマ「地歌・箏曲をめぐって」、(1) 研究発表 1 : 谷垣内和子 「地歌箏曲の詞章本の性格について」、(2) 研究発表 2 : 山根陸宏 「箏組歌本の成立における『流儀』—天理図書館蔵吉田文庫の資料を中心として—」、(3) 自由討論 (コメンテーター: 久保田敏子)

\* 第 4 回研究会

2007 年 1 月 8 日 (月・祝) 13:15-17:30、伝音センター合同研究室 1、(社) 東洋音楽学会 西日本支部第 232 回定例研究会との合同開催、テーマ「浄瑠璃本の出版システムをめぐって」、(1) 研究発表 1 : 竹内有一 「豊後系浄瑠璃本の事例報告」、(2) 研究発表 2 : 神津武男 (ゲストスピーカー、早稲田大学演劇博物館) 「義太夫本の事例報告」、(3) 自由討論、司会: 井口はる菜

## 特別研究員の研究報告

平成18(2006)年度

### ◆奥中康人

#### 「近代日本における西洋音楽の文化変容—幕末洋楽の民俗芸能化—」

本研究は、幕末明治期以降に日本に流入した西洋音楽やその楽器がどのようなプロセスを経て民俗芸能となつてゆくのかという文化変容の問題を、京都市内に残る「和洋折衷鼓笛隊」を対象に検証しようとするものである。

現在京都市には、戊辰戦争に由来する山国隊(右京区京北)を筆頭に、大正期から平安神宮の時代祭に参加する維新勤王隊(中京区)など、いくつかの鼓笛隊が存在する(西院春日神社・熊野神社・清明神社・元祇園椰神社・藤森神社)。これらの鼓笛隊は山国隊を原型とし、戊辰戦争時には軍楽(military music)であった行進曲——篠笛の旋律に西洋のスネアドラムのリズムを合わせた、いわゆる『維新マーチ』——を神社の祭礼音楽として演奏しながら、神輿の先導をつとめることが共通している。今年度、とくに注目したのはドラムの演奏法と伝習方法である。

スネアドラムの奏法は、幕末にオランダなどから日本に伝わり、山国隊には官軍から伝えられた。現在の山国隊の奏法も西洋スネアドラムに特徴的な奏法(Rudiments)がはっきりと残っている。夏休み期間を利用した軍楽保存会主催の練習では、例えば、5ストロークロールは口唱歌「ホロロン」、フラム打ちは口唱歌「エンテイ」(オランダ語に由来する)

といった具合に、リズムパターンを口唱歌に置き換えて保存会の大人から子供に対して丁寧口伝で教えられ、さらに紙に書かれた「鼓譜」も併用しているので、演奏は幕末維新时期からほとんど変化せずに継承されていると考えられる。

これに対して、1920～30年代に発足した熊野神社(左京区聖護院)の鼓笛隊は、高校生から子供たちが個々に学ぶ自主的なレッスンが特徴的である。おそらく発足当初は山国隊のような伝習が行われていたはずだが、いつの頃からか口唱歌は用いられなくなり、スネアドラムのリズムはかなり変容し、西洋式の奏法もみられない。しかし、自分たちの演奏や伝承を「訛伝」「誤伝」と意識することはなく、既にその演奏スタイルを自分たちの独自の流儀としてその「伝統」を継承してゆく段階になりつつあるところが興味ぶかい。

洋楽の土着化ともいえるこうした現象は、日本の音楽文化のなかではきわめて例外的なケースにみえるかもしれない。だが、広く日本音楽史を俯瞰してみれば実は何度も起っていた現象ではないだろうか。あたかも時間を超越した存在であるかのように語られやすい「伝統音楽」といっても、外来音楽や楽器を摂取し、変容を重ねた結果、現在の姿に落ち着いたものであり、そうであるならば、山国隊や熊野神社の和洋折衷の鼓笛隊は、「伝統音楽」としての第一歩を踏み出したことが確認できる。

こうした研究成果に基づき、これとは逆の方向性の研究、つまり近世邦楽の「洋楽化」ともいえる現象にも着目した。端的にいうと、明治期～昭和期にかけて行われた近世邦楽の採譜＝五線譜化が、

音楽や音楽家の意識にどのような変化をもたらしたかということ、とくに東京音楽学校出身の西洋音楽エキスパートたちの主導によって作られた近世邦楽（とくに長唄）五線譜について、あるいは和洋合奏という演奏フォームやそこから創造されるはずであった「国民音楽」[National Music]の可能性、あるいはその副産物として生まれた音楽文化の保存というような新しい理念についても検討した。

#### ◆小野 真

#### 「古代法会・神事における芸能の宗教性—宗教学的観点から—」

研究テーマに即して、今年は宗教とりわけ仏教と音楽（雅楽）がいかに結びつくのかという問題に取り組んだ。仏教と音楽の結びつきはよく考えれば必然ではない。音楽は、基本的に人間の感官に訴えかけ、感情を動かすことを本性とする。この本性は仏教の悟りの状態をかき乱すものであり、音楽はむしろ仏教に忌避される可能性を持つ。事実、原始仏教經典によれば、音楽は悟りや修道を邪魔するものとして排除される。まずは、仏教は音楽に対して警戒的である。しかし、一定の例外が存在する。經典の暗誦や理解を深めるために經典を朗唱することは認められるし、また仏や仏塔を供養するために音楽を奏することは功德を積むことであり、悟りへの階梯であると考えられた。大乘仏教に至るとこのコンセプトは拡大され、特に『大樹緊那羅王所問經』においては、音楽自体が法音を含み、人を悟りに導く力があると考えられるようになり、また、その法音を聞く信頼基盤を作り出すための世俗的な音楽も仏道の

方便として肯定される余地を認めている。

また、仏国土の莊嚴としても音楽は肯定される。最初は、楽伎が優美な音楽を奏で、舞いを披露する豪族の邸宅の情景を模倣して理想的な仏教的ユートピアの描写がなされたことから始まったと思われる。『無量寿經』では、阿弥陀仏の世界である浄土は、種々の音楽に満ちておりそれらは皆仏の説法である、という考え方が提示されている。

このように、基本的に仏教は音楽に対しては警戒的であるが、他方で上記のいくつかの例外的な構想に基づいて、儀礼において音楽との関わりを深めてきた。日本においては声明・雅楽が交互に演じられて進行する「法会」が、種々の仏教儀礼スタイルの主要な淵源である。この法会においては、上記の仏教と音楽の結びつきの諸構想が重層的に実現化している。上記の文献的な検討を基にして、それら諸構想の重なりを四天王寺聖霊会舞樂法要を例にとりて解きほぐす試みをした。その成果は、平成18年12月20日の日本伝統音楽研究センター第二回公開講座で口頭発表し、『日本伝統音楽研究』第4号に掲載している。

◇研究テーマに関連する著作

- \* 「法会・神事の宗教性を考察する視点」『日本伝統音楽研究』第3号（2006年3月）
- \* “Buddhistisch-musikalische Konzepte in Sutren und deren Verwirklichung im Hōe (法会)”／「仏典における仏教—音楽的コンセプトと法会におけるその現実化」『日本伝統音楽研究』第4号（2007年3月）（日本語独語同時掲載）
- \* 「異文化における雅楽の響き～天王寺舞樂海外公演の歴史から～」『四天王寺』

第715号(平成18年9・10月号)

◇研究テーマに関連する講演と演奏

\* 2006.9.1 “Höe 法会 als Urmodell japanischer buddhistischer Liturgien und darin liegende buddhistisch-musikalische Konzepte” EKO-Haus der Japanischen Kultur (Düsseldorf)

\* 2006.12.20 「仏教と雅楽－「法会」に触れてみる」京都市立芸術大学講堂 京都市立芸術大学伝統音楽研究センター 第二回公開講座

◇主な演奏活動(昨年度の補遺を含む)

\* 2006.2.3 (初演日) 宝塚歌劇「想夫恋」宝塚バウホール 龍笛指導・曲中演奏録音

\* 2006.4.22 聖霊会舞楽大法要舞楽 左方太太鼓(前半) 舞楽舞人「太平楽」

\* 2006.8.31 Gagaku-Konzert(鞆鼓、箏、箏主絃), EKO-Haus der Japanischen Kultur (Düsseldorf)

\* 2006.11.17 第40回雅楽公演会(フェスティバルホール) 舞楽舞人「万歳楽」

\* 2006.11.28 関西大学創立120周年記念舞楽「籥の舞楽」 舞楽舞人「還城楽」

\* 2007.1.2~3 宮島厳島神社奉納舞楽 舞楽舞人「万歳楽」「延喜楽」「狛柁」「太平楽」龍笛主管(蘭陵王、納曾利)

#### ◆龍城千与枝

「日本伝統音楽における歌舞伎音楽の考察—音曲表現の視点から—」

「ア・リ・ガ・ト・ウ・ゴ・ザ・イ・マ・シ・タ」。十年ほど前にコンピュータによる合成語が生まれたとき、なんとも無機質でカタコトに聞こえた声を記憶し

ている方も多いことであろう。

母音は、それぞれの音の特徴を示す周波数特性が含まれており、これはフォルマントと呼ばれる。これらは人間の聴覚には共鳴効果の高い倍音として捉えられるので、母音は特に識別しやすい音であると言える。

このように音声からなる言葉は人間同士がなんらかの情報を伝えあうためのツールと捉えられるが、通常のコミュニケーションでは言葉が内包する「意味」やコンテキストの方が重視される。そのため、実際の会話の中では、「音」そのものが発音時に意識されることは少ない。たとえば「お」という音声聞き取りにくく「・はようございます」と聞こえても、朝に出あった人からの挨拶、という状況判断から、今の言葉が朝の挨拶であることが理解され、それに続くコミュニケーションがスムーズに行われる。

しかし、アナウンサーがニュースを読む時の発音が、このように聞き取りにくいものである場合は、聞き手のイライラは募るばかりである。聞きやすさを考慮したうえで、発音時の音の質や強さについて意識する必要性を問われる職業は、アナウンサーの他に、俳優、歌手などがあげられる。つまり、音声言語を芸術として用いる分野においては、母音のフォルマントは、最も美しく音が響く調音点として美学的な意味を付与されることになるのだ。

とりわけ、母音の響きを意識した節廻しをもちいて語られてきた伝統音楽では、そのことを強く意識してきた傾向がある。というのも、日本の音曲や声曲の伝書には必ずといっていいほど、五十音の図が載せられているのである。その五十音図

は、密教を介して伝わったサンスクリット語を日本語に置き換えて整理された五十の音の響き方を示したものであった。

ところが、この表にならって、それぞれの母音の倍音が最も強い地点に舌の調音点をあわせ、全ての音を同じ強さと長さで発音して日本語の言葉を読んだ場合には、冒頭部のように、カタコトの合成語となり、耳で聞いたときの聴き心地が極めて悪くなってしまふ。そこで、それぞれの音の響きを残したままに、単語を発音する時の息の強さをかえ、意味がわかるようにフレーズでつなげたり、あるいは区切ったりすることで、日本の伝統音楽の語りは独特の芸術性を見せてきたのである。

このように、発音時の空気量を調節する技は「息遣い」として認識され、伝えられてきた。そして、この息遣い（音を発声する時の空気量の調節）は、口頭伝承で最も重視されるものであり、楽器の演奏技術としても意識されていたと考えられる。その一つの例が口三味線によって伝えられる演奏の奏法である。口三味線は、音の高さをあらわす勘所を示すのみにあらず、勘所でしめされた音同士をいかにつなげるかを、声によって模写した表音語なのである。

今年度の研究は、この口三味線に焦点をあてたものである。その成果は、当センター紀要『日本伝統音楽研究』4（2007年3月刊）に研究ノート「口三味線の表す「いろいろ」の聞こえ方」として発表した。

◇研究テーマに関連する講演

- \* 2007.1.11 伝音セミナー「声を使った芸を聴く」京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター

#### ◆横山佳世子

「地歌箏曲における伝承の異同と問題点—『石橋』の比較考察—」

現在、私は一人の地歌箏曲演奏家として後世に継承すべき伝統（伝承）の核とは何かを自分に問いかけ、日々探求している。そして、伝統（伝承）とは、創造的に継承することであり、ただ単純に詞章の文字や音の高低・長さのみが機械的に伝わるのではなく、精神性を重んじた環境の中で人々が創造的に受け継ぐものではないかと考える。実際、地歌箏曲史の変遷に大きな影響を及ぼした歴代の天才的な演奏家・作曲家は、古典に詣でつつも各々の独自の創造を加えてきた。

今年度の研究テーマとして選んだ『石橋』は、能を原拠とする地歌作品である。地歌の各流派・芸系で様々な伝承異同が顕著に見受けられ、演奏する形態や音楽的内容も千差万別である。能のみならず長唄や常磐津など多くの種目に類似の楽曲が存在するので、まずそれらとの相互的な関連性を探り、地歌『石橋』の特徴を考察した。

地歌の各流派・芸系毎の調査では、原曲である三味線本手に対して三味線の替手を演奏する形態が多い流派、あるいは箏の手付けをあしらう形態が多い流派をまず分類し、さらに本手の手事部分の区分け方や増補部分の有無、細かい緩急・音型・詞章の異同を可能な限り調査した。三味線替手も箏も、流派によって大きな違いが認められ、大変に興味深かった。

当センターで開催されている共同研究「演奏研究—地歌・箏曲—」第5回は、「芝居歌物とその実態」をテーマに行われ、『石橋』を大きく取り上げた。新たな発見に触れ、これまで直で耳にする機会の無

かった芸系の異なる演奏家の実演にも親しんだ。今後の研究を進めていく上で大変有難く貴重な経験であった。

流派・芸系による伝承の異同を調査していくうちに、同じ流派の門人同士であっても、それぞれ演奏する個人によって細かいニュアンスのみならず、曲の骨組みを司る構成にまで強い個性が窺えるように思われた。その詳細については、引き続き研究課題としたい。

具体的な伝承の異同については、完全な調査が完了しておらず、まだ途中段階である。それらの調査が整い次第、他流派同士の合奏上で起こる諸々の問題点とその解決方法を中心に更に掘り下げて考察したい。

◇研究テーマに関連する演奏

- \* 2006.4.26 於・国立文楽劇場小ホール「地歌箏曲プレ講座－地歌箏曲の魅力－」、『尾上の松』・『八鳥』・『ゆき』『山姥』・『六段』等実演担当。
- \* 2006.5.13 於・国立文楽劇場「第22回 明日をになう新進の舞踊・邦楽鑑賞会」、『尾上の松』他演奏。
- \* 2006.5.20 於・日本伝統音楽研究センター共同研究「演奏研究―地歌・箏曲―」、『六段』・『五段砧』実演。
- \* 2006.8.11 於・府民ホールアルティ「邦楽鑑賞会」、『八重衣』演奏。
- \* 2006.8.20 於・豊中市立伝統芸能館「石の会夏季演奏会」、『残月』・『尾上の松』他演奏。
- \* 2006.9.24 於・日本伝統音楽研究センター共同研究「演奏研究―地歌・箏曲―」、『こんかい』実演。

## 委託研究の報告

(平成18年度)

### ◆亀村正章

#### 「オープンリールテープ収録内容の調査研究とデジタル化」

日本伝統音楽研究センター所蔵のオープンリールテープ40本に収録されている貴重音源を整理し、収録曲名の記載されていない曲名を特定したうえで分類整理し、データ化するとともに、収録音源をデジタル化し音楽用CDに移しかえることを委託。

### ◆三木俊治

#### 「古楽器の修復と保存調査に関する研究」

日本伝統音楽研究センター所蔵の古楽器約50点を総点検し、いかに修復し、保存すればよいか調査研究を行い報告書を作成するとともに、可能な範囲で古楽器の欠損部分を修復し、少なくとも音が再現できる状態にすることを委託。

(田井竜一)

## 専任研究員の活動報告

平成 18 (2006) 年度

(平成 17 年度補遺を含む)

吉川 周平

## ◆著作活動

- \* 2006.03 討論参加、藤井知昭責任編集『中部高等学術研究所共同研究会 アジアにおける文化クラスター (IV) - 叙事詩の系譜と変容 -』Chubu Institute for Advanced Studies、Studies Forum Series 44、愛知、中部高等学術研究所、pp.17-19、p.60
- \* 2006.03 「学校現場における日本民俗音楽教育の実践 - その現状と課題 -」(第 4 回民俗音楽研究会報告 - 2004 埼玉県秩父市)、『民俗音楽研究』31、pp.80-84
- \* 2006.04.06 「舞踊の正倉院にピナ・バウシュが加わる - 日本の伝統舞踊から見るタンツテアター -」、『ピナ・バウシュ ヴッパタール舞踊団 二〇〇六年』、東京、日本文化財団、pp.50-53
- \* 2006.07 「日本伝統音楽の研究」、『KYOTO MUSICIAN 京都音楽科クラブ会報』第 577 号 (第 51 巻第 7 号)、京都、pp.2-3
- \* 2006.08.31 補訂、吉川節子作成「吉川英史名誉会員年譜・業績」、『東洋音楽研究』71、pp.219-252
- \* 2006.11 「敦煌学と日本伝統音楽」、『芸大通信』7、京都市立芸術大学広報誌、p.7
- \* 2006.11.01 「中国曲芸と莫高窟鑑賞の旅」、『日中文化交流』724、東京、日本中国文化交流協会、p.1

- \* 2006.07.13 事典項目「香川県・概説」、『日本の祭り文化事典』、東京、東京書籍株式会社、pp.6850-6870

## ◆口述活動

- \* 2006.01.19 講演「東アジアの神まつりと芸能 - 日本の神楽とユタの神まつりをめぐって -」市民教養講座・歴史講座 B コース「世界の民族文化と古代日本」、兵庫県姫路市教育委員会主催、姫路市・山陽百貨店 7 階キャスパホール
- \* 2006.05.20 講演「瀬戸内地方のまつりと芸能 - 雨乞いの念仏踊りと盆踊りを中心に -」、瀬戸内海歴史民俗資料館土曜講座、香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館会議室
- \* 2006.11.03 演目解説、第 48 回香川県芸術祭くさぬき郷土芸能まつり、香川県仲多度郡まんのう町琴南公民館
- \* 2006.12.07 解説『『日本音楽』と『日本伝統音楽』』、平成 18 年度第 7 回伝音セミナー、日本伝統音楽研究センター合同研究室 1

## ◆プロデュース活動

- \* 2006.11.25 演出・舞台監督 (共同)「第 56 回全国民俗芸能大会」、東京、日本青年館

## ◆調査活動

- \* 2006.07.09 香川県仲多度郡まんのう町の大川念仏踊を調査
- \* 2006.07.11 香川県東かがわ市白鳥町の松原太鼓と虎頭の舞を調査
- \* 2006.08.21 香川県仲多度郡まんのう町の大川念仏踊を調査
- \* 2006.08.13 愛媛県越智郡上島町の生

名島と広島県尾道市因島の盆踊りを調査

- \* 2006.08.14 愛媛県今治市伯方島北浦と同県松山市中島町粟井の盆踊りを調査
- \* 2006.08.15 岡山県倉敷市通生浜と同市下津井の田之浦とまだかな公園の盆踊りを調査
- \* 2006.08.16 香川県東かがわ市白鳥町三本松と同県さぬき市津田町ならびに志度町の盆踊りを調査
- \* 2006.08.17 香川県三豊市仁尾町と詫間町の盆踊りを調査
- \* 2006.08.21 香川県仲多度郡まんのう町の大念仏踊を調査
- \* 2006.08.23 香川県さぬき市津田町の南川太鼓と同市大川町富田字筒野の筒野の虎頭の舞を調査
- \* 2006.09.22 香川県高松市鬼無町佐料の編笠神楽を調査
- \* 2006.10.14 広島県広島市安佐南区沼田町の阿刀神楽を調査
- \* 2006.09.25 香川県高松市鬼無町佐料の編笠神楽を調査
- \* 2006.12.21 香川県東かがわ市大川町の筒野の虎頭の舞を調査

◆在外研修

- \* 2006.09.09-19 中国の音楽・芸能の調査、北京市、敦煌市、西安市、上海市

◆学内活動

- \* 評議員、国際交流委員会、「京都国際会議2006」開催委員会、「京都国際会議2006」実行委員会、将来構想委員会、全学広報委員会、自己点検・評価委員会、セクハラ調査委員会、日本学生支援機構奨学金返還免除候補者選考委員

会、安全衛生委員会、京都市立芸術大学芸術教育振興協会

◆対外活動

- \* 文化庁文化審議会文化財分科会第5専門調査会会長代理・無形民俗文化財委員会委員長
- \* 文化庁平成18年度(第61回)芸術祭審査員(音楽部門・関西)
- \* 大阪府文化財保護審議会委員
- \* 大阪府平成18年度ふるさと文化再興事業・伝統文化総合支援研究委員会委員
- \* 大阪府民俗芸能緊急調査委員会委員長
- \* 第47回近畿・東海・北陸ブロック民俗芸能大会実行委員会顧問
- \* 香川県文化財保護審議会委員
- \* 香川県平成18年度ふるさと文化再興事業・伝統文化総合支援研究委員会委員
- \* 香川県立歴史民俗資料館運営協議会会長
- \* 中部高等学術研究所共同研究員
- \* 東洋音楽学会第57回大会実行委員長
- \* 日本歌謡学会評議員
- \* 舞踊学会理事
- \* 民族芸術学会理事
- \* 民俗芸能学会理事

久保田 敏子

◆著作活動

◇解説・楽曲論

- \* 2006.1～隔月連載 「楫枕」「櫻川」「夏の曲」「四季の眺」「宇治巡り」、『創明』、創明音楽会刊
- \* 2006.2～隔月連載 「六段の調」「時鳥の曲」「夏の曲」「菊の露」「影法師」「梅の宿」、「温故知新～古曲をたずねて～」、

- 『楽報』、(財)都山流尺八楽会刊
- \* 2006.4.30 「四季の富士」「秋風の曲」  
「川千鳥」「出口の柳」「翁」「古道成寺」、  
『琴友会』なにわ芸術祭プログラム、サ  
ンケイホール
  - \* 2006.5.13 「尾上の松」「たぬき」「桜狩  
り」「母の唄」「雲のあなたに」「雨後」「翼  
に乗って」、『明日をになう新進の舞  
踊・邦楽鑑賞会』プログラム、国立文  
楽劇場主催公演
  - \* 2006.5.27 「継山流箏組歌菜落」「水の  
変態」「清流」「残月」、『菊井松音生誕百  
周年記念事業・菊井礼子リサイタル』  
プログラム、伊丹アイホニックホール
  - \* 2006.6.17 「箏合奏協奏曲(須山知行)」  
「新娘道成寺」「童曲山の水車・チョコ  
レート・赤い牛の子」「和楽器のための  
三重奏曲(小山清茂)」「大和の春」、大  
阪新音『宮城道雄を偲ぶ箏の夕べ』プ  
ログラム、いずみホール
  - \* 2006.6 「六段の調」「新浮舟」「夏の  
曲」「新青柳」、『箏のしおり』小野正志  
CDアルバム解説書、邦楽社刊
  - \* 2006.10.20 「融」「五段砧」「雪」、  
『竹山順子リサイタル』プログラム、兵  
庫芸術劇場
  - \* 2006.11.1 「尾上の松」「五段砧(前  
歌付)」「風(牧野由多可)」「瑞星(山  
本邦山)」、『太田道嶺リサイタル』プ  
ログラム、当日口述共、イシハラホール
  - \* 2006.11.19 「千鳥の曲」「御山獅子」「  
蟬の曲」「ゆき」、『菊津木昭傘寿記念  
胡弓演奏会』プログラム、当日口述共、  
国立文楽劇場
  - \* 2006.11.11 「城山狸」、『吉村小ゆ  
う舞の会』プログラム、紀尾井ホール
  - \* 2006.11.28 「乱輪舌」「秋の曲」「八  
重衣」「菊の朝(松竹梅打ち合わせ)」、  
『菊珠三奈子リサイタル』プログラム、  
当日口述共、テイジンホール
  - \* 2006.11.30 「隠れ傘鬼女面影(桐竹  
勘十郎振付)」「紀州道成寺」、『東音中  
島勝祐りさいたる～女の情念 鬼にも蛇  
にも～』プログラム、紀尾井小ホール
  - \* 2006.11.30 長唄「安宅の松」「猿まわ  
し」「勸進帳」、山田流箏曲「鐘が岬」、  
一中節「泰平船盡」、創作浄瑠璃「からか  
さ俄」、『中島勝祐一門会』プログラム、  
紀尾井ホール
  - \* 2006.11.30 「上方じょうりについて」  
「天網島」「隠れ傘鬼女面影」「大経師  
昔暦」、『中島勝祐 CD アルバム II』ビ  
クター刊
  - \* 2006.12 「冬の曲」「芥子の花」「越後獅  
子」「萩の露」、日本伝統文化振興財団邦  
楽オーディション合格者 CD『野口悦子』  
ビクター
  - \* 2006.12 「熊野」「初音の曲」六玉川」、  
日本伝統文化振興財団邦楽オーディシ  
ョン合格者 CD「奥山益勢」、ビクター  
刊
- ◇論文・論考・評論・寄稿
- \* 2006.1.14 「現代邦楽の父宮城道雄」  
日本経済新聞夕刊文化欄
  - \* 2006.1.14 「昔語りに聞いた家庭の音  
曲」国立劇場自主公演『三曲』プ  
ログラム
  - \* 2006.4.1 「地歌・箏曲の先師たち～  
箏曲の流派～5」、『三曲』日本三曲協  
会刊
  - \* 2006.5.15 「長谷校枝伝その5」『長谷  
記念邦楽コンクール』本選プログラム、  
熊本市民ホール
  - \* 2006.7～9 連載 「初夏の嵐山～楓の  
花」「宇治川の情景～晒」「猿沢池と鹿  
～十三鐘」「丑の刻参り～貴船」「坂田

藤十郎襲名と新町夕霧文章「芸能神弁財天～竹生島」「京舞～八島」「蹴鞠の庭～新青柳」「河原院での秋の情趣～融」「松虫塚～虫の音」「冬の情景～ゆき」、『芸能の里～地歌箏曲の情景』、日本経済新聞月曜夕刊

- \* 2006.10.1 「地歌・箏曲の先師たち～箏曲の流派～6」、『三曲』日本三曲協会刊

(2006年12月分まで)

#### ◆口述活動

##### ◇講演

- \* 2006.3.3 「今後の高等学校における邦楽教育について」、大阪府教育委員会主催『我が国の伝統文化を尊重する教育に関する実践モデル事業報告会』大阪府立教育会館
- \* 2006.4.26 「地歌箏曲の魅力」、『地歌箏曲プレ講座』、国立文楽劇場小ホール
- \* 2006.5.16 「地歌はおもしろい～庶民に愛され続けた上方音楽・地歌の魅力～」、日文研共催実演付講演講座、京都府民ホールアルティ
- \* 2006.9.5 「声明・講式から地歌に至る日本の語り・歌の歴史」、『国際密教学術大会』、高野山大学講堂
- \* 2006.10.22 「宮城道雄の偉業について」、『桐絃社シリーズ演奏会～宮城道雄没後50年記念レクチャーコンサート』、イズミホール

##### ◇楽曲解説・レクチャー他

- \* 2006.4.1 「主題と六つの変奏くさくから>」「御代の春」「吉備国風土記より<霜月・豪溪鎗秋>」「萩の露」「秋の曲」「北摂四季の譜<古曾部>」、『飛山桂・百合子ジョイント・コンサート』、京都文化芸術会館

- \* 2006.4.30 「夏夜の曲」「春の景色」「星と花と」「長等の春」「四季の眺」「氷の雫音」「残月」「若菜」「こと歌琴線」「川千鳥」「玉川」「六段」、『当道友楽会定期演奏会』、大阪メルパルク
- \* 2006.6.7 「宮城作品について」、『宮城道雄を忍ぶ箏の夕べ』、いずみホール
- \* 2006.6.18 「解説にかえて」、『還暦記念・大木富志奏心会地歌箏曲演奏会』、池坊こころホール
- \* 2006.7.22 「楽曲解説」、琴友会『古典を勉強する会』、エナジーホール
- \* 2006.8.6 講評『高等学校総合文化祭奏楽部門』、長岡京文化ホール
- \* 2006.9.10 「嵯峨の秋」「須磨明石(菊武祥庭)」「初音」「萩の露」「新雪月花」「新青柳」「羽衣(継山流奥組)」「石橋」「五段砧」「八重衣」「越後獅子」、当道友楽会『祥門会』、国立文楽劇場
- \* 2006.10.30 「月のしらべ」「磯千鳥」「楫枕」「翁」「梓」、『菊伊田温子地歌箏曲演奏会』、玉水会館ホール
- \* 2006.10.30 「浪速菊」「松竹梅」「菊の露」「六段調」「黒髪」「八千代獅子」「越後獅子」「小簾の戸」「摘草」「萩の露」他解説記載曲、『菊津木昭傘寿記念胡弓演奏会』、国立文楽劇場
- \* 2006.12.2 「飛騨組」「琉球組」「錦木」「下総」「待つにござれ」「堺」、『第46回三味線本手組歌の会』、国立文楽劇場  
(2006年12月分まで)

#### ◆調査活動 多数につき略

#### ◆対外活動 前年に同じ

## 後藤 静夫

## ◆著作活動

- \* 2006.03.31 エッセイ「余録 金沢の浦上四番崩れ」、『日本伝統音楽研究センター所報』7、pp.6-11
- \* 2006.04.01 解説「今に生きる伝統人形芝居」、NHK『日本の伝統芸能』、pp.120-123
- \* 2006.05.22 巻頭言「言葉の力・音の力」近松応援団機関誌 『囀』57、p.1
- \* 2007.01.16 論考・解説「六世鶴澤寛治」「二世野澤喜左衛門」、週刊朝日『人間国宝 34・文楽Ⅰ』、pp.25-26
- \* 2007.01.23 論考・解説「二世桐竹紋十郎」「二世桐竹勘十郎」、週刊朝日『人間国宝 35・文楽Ⅱ』、pp.25-29

## ◆プロデュース活動

- \* 2006.07.28～29 企画・講義・司会 京都造形芸術大学通信教育部総合教育科目「伝統演劇・文楽」三業の実演と解説・講義、前期、国立文楽劇場他
- \* 2006.11.17～18 同上 後期
- \* 2006.09.07 企画・解説 日本伝統音楽研究センター2006年度第4回伝音セミナー「語り物の流れ」、合同研究室1
- \* 2006.10.07 企画・制作・演出 「萬福寺の声明（梵唄）」、京都国際会議2006、本学講堂
- \* 2006.11.15 共同企画・司会 日本伝統音楽研究センター平成18年度第1回公開講座「じょうりり西・東一義太夫節と常磐津節」（出演：竹本津国大夫・竹澤團吾、常磐津都代太夫・常磐津綱男）、京都府立府民ホール アルティール

## ◆講演・口述活動

- \* 2006.05.25 コメント取材「大正末～昭和初期の文楽」、日本経済新聞
- \* 2006.06.06 講演「文楽の歴史・構造」（人形実演・吉田清之助氏）、浄土宗婦人会年次総会記念講演、ホテルニューオータニ
- \* 2006.09.13 インタビュー記事「文楽の特質、現場で多角的に」、京都新聞朝刊「研究ふぁいる」
- \* 2006.10.13 講演「尼崎 思いつくままに」、阪神商工共済会文化講演会、尼崎労働福祉会館
- \* 2006.12.21 コメント取材「僕らが広げる文楽の裾野」、読売ライブ

## ◆講義・講座活動

- \* 2006.07.04～06 人形劇パペットアーク特別講座講師「文楽とはどんな人形劇か」 東かがわ市とらまる人形劇研究所
- \* 2006.07.27 講義「文楽と淡路人形の伝承について」、神戸大学国際文化学部、異文化研究交流センタープロジェクト講演会
- \* 2006.08.19 講義「文楽の制作・演出、太夫の風について」、文楽応援団研修会

## ◆調査・取材活動

- \* 2006.05.09 ミホ美術館、パークコレクション展、風俗図調査
- \* 2006.04.11 竹本津駒大夫氏、聞き取り調査
- \* 2006.05.28 伊勢神宮式年遷宮、慶光院お木曳き調査
- \* 2006.06.04 峰カラクリ工房、調査
- \* 2006.06.05 豊竹十九大夫師、聞き取り調査

- \* 2006.09.29 文楽地方公演、調査、尼崎市民会館
- \* 2006.10.22 全国人形芝居サミット、調査、能勢浄瑠璃シアター
- \* 2006.11.11 思文閣美術館「雅楽の変遷」展、調査
- \* 2006.12.15 國學院大學神道研究所、江戸図等調査
- \* 2006.12.25 鶴澤清介氏、聞き取り調査他

#### ◆ 対外活動

- \* 日本万国博覧会記念機構、基金のあり方検討会委員（委員長代理）
- \* なにわ芸術祭「新進舞踊家競演会」、審査員
- \* 京都大学地球環境学堂三才学林、運営懇話会委員
- \* 大阪府立東住吉高校、学校協議会委員他

#### 田井 竜一

#### ◆ 著作活動

- \* 2006.03.31 論文「桂地蔵前六斎念仏—その伝承をめぐって—」、『日本伝統音楽研究』第3号、pp.79-103
- \* 2006.03. DVDブック、桑石市教育委員会編『桑名石取祭総合調査報告書DVDブック』、三重、桑石市教育委員会、DVDブック、DVD2枚組、2006年3月（DVD制作協力、DVDブック「第1章第3節 太鼓・鉦の打ち方の様式」、「第3章 囃子の機会と機能」の分担執筆、pp.12-14、22-31）
- \* 2006.03. 調査報告、桑石市教育委員会編『桑名石取祭総合調査報告書』、三

重、桑石市教育委員会、別冊、DVDブック付き、2006年3月（「第9章 祭車の囃子」の樋口昭・鈴木由喜子との分担・共同執筆、pp.395-407）

- \* 2006.03.31 調査報告「京都祇園祭り北観音山の囃子」、『日本伝統音楽研究』第3号、pp.87-111（増田雄との共同執筆）
- \* 2006.07.14 調査報告「京都祇園祭り鶏鉦の囃子」、祇園囃子アーカイブズ、伝音アーカイブズ、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター・ホームページ、<http://jupiter.kcu.ac.jp/jtm/database/gionbayashi/niwatoriboko/index.html>（増田雄との共同執筆、インターネット改訂版）
- \* 2006.12.19 調査報告「京都祇園祭り菊水鉦の囃子」、祇園囃子アーカイブズ、伝音アーカイブズ、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター・ホームページ、<http://jupiter.kcu.ac.jp/jtm/database/gionbayashi/kikusuiboko/index.html>（増田雄との共同執筆、インターネット改訂版）
- \* 2007.03 教科書編集協力「世界の諸民族の音楽に親しもう」（編集協力）、畑中良輔他『高校生の音楽 1』、東京、教育芸術社、pp.120-123、2006年3月9日検定済
- \* 2006.07.07 CD解説『横浜能楽堂ライブ 日本の音 シリーズ：町衆の心意気』、横浜能楽堂企画、東京メディアコネクションズ（株）制作、（有）キャンディ販売、CACU-2513、12センチCD（分担執筆）
- \* 2006.02.27 報告「日本ポピュラー音楽学会第17回大会報告：個人発表B[2・3]」、JASPM NEWSLETTER（日本

ポピュラー音楽学会) 第 67 号、pp.9-10

◆口述活動

- \* 2006.06.18 講演「山・鉦・屋台の祭り  
と囃子—祇園囃子を中心に—」、福井県  
立若狭歴史民俗資料館郷土史講座、福  
井県立若狭歴史民俗資料館講堂
- \* 2006.11.16 研究発表「図像にきく『祇  
園囃子』」、京都市立芸術大学日本伝統  
音楽研究センター 共同研究「祇園囃子  
の源流に関する研究」、2006 年度第 6  
回研究会、京都市立芸術大学日本伝統  
音楽研究センター 合同研究室 1
- \* 2006.12.16 研究発表「総括討論：風流  
拍子物・羯鼓稚児舞・シャギリの囃  
子」、京都市立芸術大学日本伝統音楽研  
究センター 共同研究「祇園囃子の源流  
に関する研究」、2006 年度第 7 回研究  
会、京都市立芸術大学日本伝統音楽研  
究センター 合同研究室 2

◆企画

- \* 2006.09.07 企画・解説 日本伝統音  
楽研究センター 2006 年度第 2 回伝音セ  
ミナー「国際文化振興会レコード  
(KBS) その 1」、合同研究室 1

◆調査・取材活動

- \* 継続中 京都祇園祭り囃子調査、桂地蔵  
前六斎念仏調査、石取り祭り調査、魚  
吹八幡神社祭礼調査

◆学内活動

- \* 将来構想委員会教育研究理念・計画部  
会部会員

◆対外活動

- \* 京都ノートルダム女子大学人間文化学

部非常勤講師 (2006.04 ~ 09)

- \* 京都市立芸術大学音楽学部非常勤講師  
(2006.10 ~ 2007.03)
- \* (社) 東洋音楽学会理事、機関誌編集  
委員会委員、改革検討委員会委員、第  
57 回大会実行委員会委員 (~ 2006.10)
- \* 日本音楽学会関西支部委員 (~  
2006.12)
- \* 日本ポピュラー音楽学会監事 (~  
2006.10)
- \* A member of the editorial Board, *Perfect  
Beat: The Pacific Journal of Research into  
Contemporary Music and Popular Culture*
- \* 国立民族学博物館共同研究員
- \* 人間文化研究機構連携研究員
- \* 日本学術振興会人文・社会科学振興プ  
ロジェクト研究共同研究員
- \* 科学研究費補助金 (基礎研究 (B)) 「中  
国新疆ウイグル族において継承し展開  
する合奏音楽“ムカム”の音楽様式研  
究」(研究代表者：樋口昭) 研究分担者
- \* 兵庫県文化財保護審議会委員 (2006.07  
~)
- \* 桑名石取祭の祭車行事保存伝承委員  
会委員 (桑名市教育委員会、2007.02 ~)
- \* 所属学会：(社) 東洋音楽学会、日本  
オセアニア学会、日本音楽学会、日本  
ポピュラー音楽学会、日本民族学会、  
民族藝術学会

竹内 有一

◆著作活動

- \* 2006.05 項目執筆『歌舞伎登場人物事  
典』、河竹登志夫監修・古井戸秀夫編、  
東京、白水社、1076pp.
- \* 2006.08.23 学会レポート「報告」(東

洋音楽学会西日本支部定例研究会 第228回例会での研究発表に対する批評2件)、『(社) 東洋音楽学会西日本支部支部だより』第56号、pp.5,8-9

\* 2006.11.15 パンフレット「じょうるり西・東」(解説・詞章・演奏者紹介・図版)(共編)、日本伝統音楽研究センター平成17年度第1回公開講座、4pp.

\* 2006.11.15 資料「義太夫節の詞章を用いた常磐津節一稽古本出版一覧」、同上、1p.

\* 2006.09.03 資料「伝音所蔵 箏曲・地歌の歌本一覧」、日本伝統音楽研究センター共同研究「詞章本とその出版に関する研究」、2pp.

\* 2006.06.03 解説「浄瑠璃について／三味線について／常磐津節について／道行蝶吹雪／三社祭」、第13回ホームコンサート(日本聖公会川越キリスト教会)、pp.3-5

\* 2006.06.03 資料「鑑賞の手引き 常磐津節の洲崎堤・三社祭」、同上、10pp.

\* 2007.02.16 解説「長唄『船弁慶』一能楽を乗り越えようとした近代音楽の嚆矢一、日本の響き 今藤政太郎プロデュース「和の音を紡ぐ」、いずみホール

\* 2006.11.12 評論「薪常磐津：存在価値問う新たな挑戦」、『京都民報』第2259号、p.5

\* 2006.11.20 評論「伝統芸能レビュー：身体と装置の葛藤」(京都芸術センター主催公演「継ぐこと・伝えること 番外編『きりしとほろ上人伝』)、『明倫art 京都芸術センター通信』Vol.79、p.6

\* 2007.3.31 報告「特集 京都国際会議2006 レポート」、『日本伝統音楽研究センター 所報』第8号

\* 2007.02 報告「(財) ポーラ伝統文化振興財団による助成事業に関する報告書」、京都国際会議2006開催委員会、16pp

\* 2006.09 実施報告「報告2」「報告3」(日本伝統音楽研究センター共同研究「詞章本とその出版に関する研究」平成18年度第3回研究会)、日本伝統音楽研究センター web ページ

\* 2007.02 実施報告「報告2」(日本伝統音楽研究センター共同研究「詞章本とその出版に関する研究」平成18年度第4回研究会)、日本伝統音楽研究センター web ページ

#### ◆口述活動

\* 2006.06.24 研究発表「絵解きとその研究の現状」(今田健太郎氏と共同)、日本伝統音楽研究センタープロジェクト研究「近代日本における音楽・芸能の再検討」、日本伝統音楽研究センター

\* 2007.03.10 報告「近代の楽器製作における伝統と創作―田邊楽器ワークショップの記録から―」、同上、同上

\* 2007.01.08 研究発表「浄瑠璃本の出版システムをめぐって：豊後系浄瑠璃本の事例報告」、東洋音楽学会西日本支部第232回定例研究会・日本伝統音楽研究センター共同研究「詞章本とその出版に関する研究」合同研究会、日本伝統音楽研究センター

\* 2006.10.21 原稿プロスペクト「音楽史への新しいアプローチ：近世における外来文化への意識と音楽」、日本伝統音楽研究センタープロジェクト研究「教育現場における日本音楽」、日本伝統音楽研究センター

\* 2006.11.25 原稿プロスペクト「音楽

の行われる場：劇場空間」、同上、同上

- \* 2006.05.14、08.13 調査報告「役者評判記『役者官昇』について」、咄半分芝居半分の会、高槻市立文化会館集會室
- \* 2007.02.16 レクチャー進行「日本の響き 今藤政太郎プロデュース「和の音を紡ぐ」、いずみホール

#### ◆プロデュース活動

- \* 2006.06.01 構成・解説・資料展示「2006年度第1回伝音セミナー：古曲保存会レコード その1」、日本伝統音楽研究センター
- \* 2006.06.03 構成・司会・解説「第13回ホームコンサート どきどきわくわくの日本古典音楽」、日本聖公会川越キリスト教会
- \* 2006.11.15 構成・司会・解説「じょうり西・東一義太夫節と常磐津節一」(共同)(出演：竹本津国大夫・竹澤團吾、常磐津都代太夫・常磐津綱男)、日本伝統音楽研究センター平成18年度第1回公開講座、京都府立府民ホールアルティ
- \* 2007.02.01 解説・資料作成「2006年度第9回伝音セミナー：富崎春昇の至芸を聴く」、日本伝統音楽研究センター
- \* 2006.09.12、11.07、12.21、2007.01.25、02.22、03.22 翻刻勉強会(第1～6回)、日本伝統音楽研究センター

#### ◆調査・取材活動

- \* 継続中 詞章本等の書誌調査およびデータ作成(上野学園日本音楽史研究所ほか)
- \* 継続中 版本史料の市場調査および収集(古書店、古書市、ネットオークション等)

- \* 継続中 歌舞伎公演(歌舞伎座、国立劇場、南座、大阪松竹座、名古屋御園座、大阪松竹座、浅草公会堂)
- \* 継続中 文楽公演、邦楽公演、日本舞踊公演(国立劇場、国立文楽劇場ほか)
- \* 2006.04～05 都をどり(祇園甲部歌舞練場)、京おどり(宮川町歌舞練場)、北野をどり(上七軒歌舞練場)、鴨川をどり(先斗町歌舞練場)
- \* 2006.07.24 浄瑠璃本基礎知識講座(早稲田大学)
- \* 2006.09.27、09.29 継ぐこと・伝えること番外編「きりしとほろ上人伝」(京都芸術センター)
- \* 2006.11 展覧会「上野学園日本音楽史研究所所蔵 雅楽の変遷」(思文閣美術館)
- \* 2006.12 大須師走歌舞伎スーパー一座公演(大須演芸場)
- \* 2007.01.30 「楽劇の祭典」特別公演：宮古路豊後掾と「睦月連理玉椿」の世界(京都府立府民ホール アルティ)

#### ◆演奏活動

- \* 2006.04 陽春大歌舞伎、常磐津「狐火」の浄瑠璃演奏、名古屋御園座
- \* 2006.12 名古屋むすめ歌舞伎公演、常磐津「釣女」の浄瑠璃演奏、名古屋市芸術創造センター
- \* 2007.01.13 NHK教育テレビ「芸能花舞台」、常磐津「七福神」の浄瑠璃演奏

#### ◆学内活動

- \* 京都国際会議2006実行委員会委員、同連絡協議会委員(企画・運営・助成申請・助成報告ほか)、同広報部会委員、同記録部会委員、同事業及び経理事務

責任者

- \* 自己点検・評価委員会委員、同大学評価部会委員、同作業部会委員
- \* 広報委員会委員、同電子メディア検討部会委員、同印刷メディア検討部会委員
- \* 情報管理委員会委員、同ネットワーク管理運営部会委員、同情報スペース運営部会委員
- \* 附属図書館運営委員会委員

◆ 対外活動

- \* 上野学園日本音楽史研究所共同研究員
- \* お茶の水女子大学比較日本学研究センター研究プロジェクト「日本近世芸能に関する総合的研究」客員研究員（平成17年度補遺）
- \* 東洋音楽学会 西日本支部委員
- \* 楽劇学会 編集委員
- \* 近世文学会、藝能史研究会、歌舞伎学会、国際浮世絵学会、洋学史研究会、長野郷土史研究会 各会員
- \* 常磐津協会 正会員
- \* 洋楽流入史研究会 事務・ホームページ管理・メール会報発行担当
- \* 近世邦楽研究会、翻刻勉強会 幹事
- \* 咄半分芝居半分の会、日本音楽研究文献講読会、舞踊学院生勉強会 同人
- \* フェニックス・エヴォリユーション・シリーズ選考アドバイザー

藤田 隆則

◆ 著作活動

- \* 2006.03 単著口頭発表報告「音楽学からの提言」、『妙高ゼミナール 音楽教育の実践と研究の新たな展望（日本音楽教育学会 第8会音楽教育ゼミナール

2005）』（妙高ゼミナール実行委員会編）、pp.77-78

- \* 2006.06 単著エッセイ「能楽堂の言葉と声」、『日本の伝統的な響きを軸とする多媒体表象芸術の構造およびその創造過程の研究—作品の創作を通して』、科学研究費補助金基盤研究C（研究代表者：猿谷紀郎、課題番号15604011）研究成果報告書、pp.39-48
- \* 2006.07 単著論文（査読あり）「小歌かかりの拍節法—能の小歌から考える」、『能と狂言』（能楽学会機関誌）第4号、pp.76-92
- \* 2006.08 単著エッセイ「シテを立たせる囃子・こらえるシテ」、『能』（京都観世会館）2006（平成18）年8月号（通巻579号）、1p.
- \* 2006.12 単著口頭発表報告「日本の古典音楽の場合」（プロジェクト研究2）日本音楽をどのように捉えたらいいのか（その1）—場・伝える・身体—のうち担当部分、『音楽教育学』第36巻第2号、pp.62-66
- \* 2007.03 単著講演会記録「民俗芸能をとらまえる—芸能史、音楽学、文化人類学、認知科学」、『文化人類学分野講演会記録集2』（文部科学省学術フロンティア推進事業「阪神・淡路大震災後の地域社会との共生をめざした大学の新しい役割に関する実践的研究」報告書）、神戸学院大学、2007年3月、pp.3-未定

◆ 口述活動

- \* 2006.07.15 研究発表「無形文化財をなぞり形づくる身体」、特定領域研究「身体資源の構築と配分における生態、象徴、医療の相互連関」（菅原和孝代表）

2006年度第2回研究会、京都市、京大  
会館

\* 2006.08.03 司会および音源内容解説  
「国際文化振興会レコード (KBS) その  
2」第3回伝音セミナー、2006年8  
月3日、京都市、京都市立芸術大学日  
本伝統音楽研究センター合同研究室1

\* 2006.10.14 ワークショップの企画実  
行と講義「未来の記譜法 (その1)」松  
井紫朗・高橋悟・Thorsten Ebeling 三氏  
による展覧会「TRANS-ACTING 未来の  
記譜法」における関連企画、京都市：  
京都芸術センター

\* 2006.10.15 ワークショップの企画実  
行と講義「未来の記譜法 (その2)」松  
井紫朗・高橋悟・Thorsten Ebeling 三氏  
による展覧会「TRANS-ACTING 未来の  
記譜法」における関連企画、京都市、  
京都芸術センター

\* 2006.10.29 パネルにおける研究発表  
「日本音楽をどのように捉えたらいいの  
か (その1) 一場・伝える・身体一」  
(伊野義博、澤田篤子との共同パネル)、  
日本音楽教育学会第37回大会、千葉市、  
千葉大学教育学部

\* 2006.11.18 研究発表、「パフォーマンス  
の「今ここ」から「離脱」する作法  
—西浦田楽より—」、特定領域研究「身  
体資源の構築と配分における生態、象  
徴、医療の相互連関」(菅原和孝代表)  
2006年度第3回研究会、京都市、京大  
大学総号人間学部棟1207室

\* 2006.12.10 研究発表 (paper presenta-  
tion) “Performers’ Embodied “separation”  
in the Ritualistic Dance Performance of the  
Nishiure Dengaku.” Towards Anthropology  
of Resources : International Symposium at  
ILCAA 2006 held at Research Institute for

Languages and Cultures of Asia and Africa  
(ILCAA), Tokyo University of Foreign  
Studies. (東京都：東京外国語大学アジ  
ア・アフリカ言語文化研究所第会議室)

2006.12.23 司会および音源内容解説「音  
に聴く大正・昭和の能」、能楽学会第7  
回能楽フォーラム、大阪市、大阪大学  
中之島センター

#### ◆プロデュース活動

\* 2006.10.07 企画・実施・資料作成補  
助 (Bonnie Wade との共同)、ボニー・  
ウェイド氏講演「音楽の知そして平和」、  
京都国際会議2006「芸術がデザインす  
る平和のかたち」、2006年10月7日、  
京都市、京都市立芸術大学講堂

\* 2006.12.20 企画・実施・資料作成補  
助 (小野真との共同)、「雅楽と仏教一  
法会に触れてみる」、京都市立芸術大学  
日本伝統音楽研究センター平成18年度  
第2回公開講座、2006年12月20日、  
京都市、京都市立芸術大学講堂

\* 2006.12.23 企画・実施 (飯塚恵理人  
との共同)、能楽学会第7回能楽フォー  
ラム「音に聴く大正・昭和の能」、2006  
年12月23日、大阪市、大阪大学中之  
島センター

\* 2007.01.13 企画補助・実施補助・資  
料作成補助・司会 (東洋音楽学会担当  
メンバーとの共同)「公開シンポジウ  
ム：伝統文化の継承と発展—音楽教育  
の現場から」科学研究費補助金研究成  
果公開発表 (B)、2007年1月13日、  
東京都、イイノホール

#### ◆調査・取材活動

\* 継続中 静岡県浜松市水窪町奥領家に  
おける観音祭の調査

\* 継続中 謡曲・能の囃子の伝承にかかわる調査

◆学内活動

\* 将来構想委員会財政部会委員

◆対外活動

\* 日本音楽学会関西支部委員

\* (社) 東洋音楽学会理事、機関誌編集委員会委員

\* 京都市立芸術大学音楽学部非常勤講師  
(2006.04-2006.09)

\* 神戸女学院大学音楽学部非常勤講師  
(2006.09-2007.03)

\* 所属学会 日本音楽学会、楽劇学会、  
(社) 東洋音楽学会、日本認知科学会、  
能楽学会、International Council for  
Traditional Music, Society for  
Ethnomusicology

## 京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 概要 2006

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターは、日本の社会に根ざす伝統文化を、音楽・芸能の面から総合的に研究することを目指します。

古くから日本の地に起こり、外からの要素の受容を絶えず繰り返しつつも、独自の様相を今日に呈している日本の伝統的な音楽・芸能は、日本語と同じように、日本の、そして世界の貴重な宝です。これらは、維持継承させるべきものであると共に、新しい文化創造のための源泉として発展されるべきものである、との認識をもちます。

センターは日本の伝統的な音楽・芸能と、その根底にある文化の構造を解明し、その成果を公表し、社会に貢献するように努めます。そのために国内外の研究者・研究機関・演奏家と提携し、成果や情報を共有・交流する拠点機能の役割を果たします。

京都は1200年以上にわたって、日本における文化創造の核であり続けています。このセンターは、伝統的な音楽・芸能を中心とする研究分野で、重要な役割と使命を担い、その核になることを目指します。

### ◇センターの活動

#### ◆資料の収集・整理・保存

■文献資料（図書、逐次刊行物、古文書、マイクロフィルムなどの複写・非印刷資料を含む）

■音響映像資料

■楽器資料

■絵画資料

■データベースなどの電子資料

#### ◆日本の伝統的な音楽・芸能の個別研究

■専任研究員による個人研究

■特別研究員による特定のテーマの研究

■研究者に、その専門領域に即したテーマで委託する研究

#### ◆日本の伝統的な音楽・芸能の共同研究

■国内外の多くの研究者・演奏家の参加・協力を得て、学際的・国際的な視野で、センターが行う共同研究

■センターが外部と共同して行う調査研究

#### ◆活動成果の社会への提供

■公開講座・セミナー等の開催

■紀要・所報・資料集などの出版

■インターネットなど電子媒体による公開

### ◇研究の対象

◆伝統的芸術音楽の歴史・現状・未来をみすえる

明治までに成立した伝統音楽の展開と伝承  
古代

祭礼歌謡と芸能（楽器等の考古学的遺物を含む）

上代・中古

仏教音楽（声明等）

宮廷の儀礼・宴遊音楽（雅楽等）

中世

仏教芸能（琵琶、雑芸、尺八等）

武家社会の芸能（能・狂言等）

流行歌謡（今様、中世小歌等）

近世

外来音楽（切支丹音楽、琴楽、明清楽）

劇場音楽（義太夫節・常磐津節等の浄瑠璃、長唄、歌舞伎囃子等）

非劇場音楽（地歌箏曲、三味線音楽、琵琶楽、尺八等）

流行歌謡（小唄、端唄等）

#### ◆近代社会での伝統音楽の展開をみすえる

■伝統音楽の発展とその可能性に関する事象の研究

■伝統音楽の享受と教育に関連する事象の研究

#### ◆広い視野で生活の音楽をみすえる

■民間伝承と日本関連諸地域及び先住民族の音楽・芸能の研究

■生活における音楽・芸能（わらべうた・民謡、祭礼音楽等の民俗芸能）の研究

### ◇専任研究員

所長：吉川周平（日本民俗音楽・比較舞踊学）

「日本芸能における神とほとけの表現の研究」

「民俗芸能における身体動作のかたちとその意味の研究」

教授：久保田敏子（日本音楽史学）

「邦楽の歴史的音源に関する研究」

「地歌・箏曲の作品研究」

教授：後藤静夫（芸能史・文化史）

「人形浄瑠璃・文楽の実態研究」

「芸能の伝承研究」

助教授：田井竜一（民族音楽学・日本音楽芸能論）

「山・鉾・屋台の囃子の比較研究」

「六斎念仏の研究」

助教授：竹内有一（日本音楽史学）

「音楽芸能資料の書誌的研究」

「伝記資料に関する基礎的調査」

助教授：藤田隆則（民族音楽学・比較音楽学）

「古典音楽伝授形式の比較研究」

「能・狂言の演出史」

◆非常勤講師

◆特別研究員

小野真「古代法会・神事における芸能の宗教性—宗教学的観点から—」

奥中康人「近代日本における西洋音楽の文化変容—幕末洋楽の民俗芸能化—」

龍城千与枝「日本伝統音楽における歌舞伎音楽の考察—音曲表現の視点から—」

横山佳世子「地歌箏曲における伝承の異同と問題点—「石橋」の比較考察—」

◆情報管理員

東正子「ネットワーク管理とホームページ」

◇事務室

事務長：加納則章 担当係長：田中将雄  
係員：岩城恵

◇非常勤嘱託員

学芸員：齊藤尚

研究補助員：池内美絵、小城篤子、末松憲子

◇プロジェクト研究・共同研究

◆プロジェクト研究

■「近代日本における音楽・芸能の再検討」  
研究代表者：後藤静夫

共同研究員：今田健太郎、岩井茂樹、上田学、奥中康人、川村清志、澤井万七美、竹内有一、龍城千与枝、寺田詩麻、寺田真由美、土居郁雄、廣井榮子、細田明宏、真鍋昌賢、横田洋

■「教育現場における日本音楽」

研究代表者：藤田隆則

共同研究員：井口はる菜、伊野義博、今田健太郎、小塩さとみ、加藤富美子、久保田敏子、薦田治子、澤田篤子、田井竜一、竹内有一、塚原康子、月溪恒子、永原恵三、樋口昭、水野信男、茂手木潔子、山口修

◆共同研究

■「演奏研究—地歌・箏曲—」

研究代表者：久保田敏子

共同研究員：井口はる菜、伊藤志野、岡村慎太郎、奥田雅楽之一、奥村雅楽智、片岡りサ、菊央雄司、菊信木洋子、冨緒清律、中井猛、西川かをり、野川美穂子、福田千栄子、三好晃子、横山佳世子

■「祇園囃子の源流に関する研究」

研究代表者：田井竜一

共同研究員：安達啓子、入江宣子、岩井正浩、植木行宣、垣東敏博、後藤静夫、土居郁雄、永原恵三、西岡陽子、樋口昭、福原敏男、増田雄、米田実

■「詞章本とその出版に関する研究」

研究代表者：竹内有一

共同研究員：井口はる菜、小野恭靖、久

保田敏子、後藤静夫、竹内道敬、龍城千与枝、谷垣内和子、配川美加、松岡亮、山崎泉、山根陸宏、吉野雪子、渡邊浩子

◇委託研究

「オーブニールテープの収録内容の調査研究とデジタル化」 亀村正章

「古楽器の修復と保存調査に関する研究」 三木俊治

◇沿革

平成3年6月 世界文化自由都市推進検討委員会において、廣瀬量平委員が日本伝統音楽の研究施設の必要性を訴える

平成5年3月 新京都市基本計画「大学・学術研究機関の充実」の「市立芸術大学の振興」の項で、「邦楽部門の新設についても研究する」と言及

平成8年6月 京都市芸術文化振興計画「教育・研究機関の充実」で、日本の伝統音楽や芸能を研究・教育するための体制を整えることが提唱される

平成8年10月 京都市が伝統音楽調査会（会長：廣瀬量平名誉教授）に、伝統音楽部門の調査を委託する

平成8年12月 京都市の「もっと元気に・京都アクションプラン」の「文化が元気」の項目に、伝統音楽研究部門の設置が位置づけられる

平成9年4月 実施設計費及び地質調査経費予算措置

平成10年4月 施設建設費予算措置

平成10年10月 施設建設着工（工期17ヶ月）

平成11年9月 日本伝統音楽研究センター設立準備室を設置する（室長：廣瀬量平名誉教授）

平成12年2月 新研究棟竣工

平成12年4月 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター開設

平成12年12月 京都市立芸術大学新研究棟披露式挙行

平成16年4月 吉川周平前教授が第二代所長に就任

◇施設

新研究棟6～8階

6階 センター所長室、事務室、会議室、資料室、資料管理室、個人研究室

7階 合同研究室(2)、楽器庫、貴重資料庫

8階 個人研究室(5)、研究員室(2)、視聴覚編集室、研修室(2)

（センター総面積約1,500m<sup>2</sup>）

## Research Centre for Japanese Traditional Music Kyoto City University of Arts 2006

The Research Centre for Japanese Traditional Music was founded at the Kyoto City University of Arts on April 1, 2000, with the aim of undertaking comprehensive research on traditional music and performing arts within the society and culture of Japan.

In the more than one hundred years since the Meiji Restoration of 1868, Japan has followed a path of modernization and Westernization, which has become more pronounced in the fifty something years since the end of World War II. We have reached a time ripe for the reconsideration of Japan's traditional culture, and the development of new approaches to it. The founding of the Research Centre for Japanese Traditional Music at the Kyoto City University of Arts is of particular significance in view of the fact that Kyoto has long been the living centre of Japan's traditional culture.

Kyoto is rich in physical evidence of its traditional culture, what we may term a 'visual' heritage; with the establishment of this new body, however, the city authorities have demonstrated a deep respect towards its 'aural' heritage. As a new 'centre' for research on Japan's traditional music, the Research Centre aims to make a broad and significant contribution to the field of Japanese music, by means of sharing and exchanging information and the results of researches with researchers, other research establishments and performers, not only within Japan but throughout the world.

The Research Centre for Japanese Traditional Music thus hopes to link the past with the present through a unique range of activities in research and creation, within the wider context of Japan's traditional culture.

### Activities of the Research Centre

A. Collecting, ordering, and preserving research materials of relevance to the study of Japan's traditional music and performing arts:

(1) Documentary materials (books, periodicals,

old documentary sources, copied and non-printed materials including microfilm, etc.)

(2) Audio-visual materials

(3) Instruments and related materials

(4) Pictorial materials

(5) Materials in electronic form, such as existing databases and the like

B. Individual research on Japan's traditional music and performing arts:

(1) Research by individual members of the full-time staff

(2) Research on particular themes by scholars employed as part-time research fellows

(3) Research commissioned from scholars outside of the Research Centre on their fields of speciality

C. Team research on Japan's traditional music and performing arts:

(1) Team research undertaken from an interdisciplinary and international perspective by research teams based at the Research Centre, formed for that purpose with the cooperation and participation of researchers and performers from both Japan and overseas

(2) Surveys in collaboration with other bodies and/or individuals

D. Bringing the results of research to a wider audience through the following activities:

(1) Public events including lecture series, seminars, workshops, and lecture-demonstrations

(2) Publications including a regular newsletter, an annual bulletin, and collections of research materials

(3) Electronic publications such as databases available for use online

### Fields of Research

The research fields of the Research Centre encompass the past, present and future of Japan's traditional music:

(1) The development and transmission of music prior to the Meiji Restoration of 1868

#### Prehistoric times

Religious song and performing arts

(including archaeological study of surviving examples of instruments, etc.)

#### **Ancient times**

Buddhist music (*shoomyoo*, etc.)

Ceremonial and entertainment music of the court (*gagaku*, etc.)

#### **Medieval times**

Buddhist performing arts (*biwa*-accompanied narrative, *zoogei*, *shakuhachi*, etc.)

Performing arts of the warrior class (*noo*, *kyoogen*, etc.)

Popular song (*imayoo*, medieval *kouta*, etc.)

#### **Pre-modern times**

Music from foreign sources (so-called 'Christian' music, Chinese *qin* music in Japan, *minshingaku*)

Theatrical music (*gidayuu-bushi*, other types of *jooruri* including *tokiwazu-bushi*, etc., *nagauta*, *hayashi* music in *kabuki*, etc.)

Non-theatrical music (*jiuta sookyoku*, other *shamisen* genres, *biwa*-accompanied vocal genres, *shakuhachi*, etc.)

Popular song (*kouta*, *hauta*, etc.)

#### (2) Developments in traditional music since the Meiji Restoration

The development of traditional music and its possibilities, including composition

The reception of traditional music and the place of traditional music in education

#### (3) Music in daily life, in the broadest terms

Folk transmission and the music and performing arts of areas related to Japan and of its indigenous minorities

Music and the performing arts in daily life (children's song and folk song; folk performing arts including festival music)

#### **Full-time Research Staff**

KIKKAWA Shuuhei (Director; Japanese folk music and dance)

Study of visual representation of Japanese deities

Study of form and meaning in Japanese traditional performing arts

GOTOO Shizuo (Professor; Performing arts history, Cultural history)

Research on the present of *ningyoo-jyooruri*, *bunraku*

Research on the transmission of the traditional performing arts

KUBOTA Satoko (Professor; Historiography of

Japanese music)

Research on historic recordings of traditional Japanese music

Research on works of the *jiuta* and *sookyoku* repertoires

FUJITA Takanori (Associate Professor; Ethnomusicology, Comparative musicology)

Comparative study on styles of transmission in classical music

Historical research on production and performance of Noh and Kyogen

TAI Ryuuichi (Associate Professor; Ethnomusicology, Japanese performing arts)

Comparative research on the hayasi music of festival floats

Research on *rokusai-nenbutsu* music

TAKEUCHI Yuuichi (Associate Professor; Historiography of Japanese music)

Bibliographic research on Japanese music and performing arts

Preliminary research of biographical documents

#### **Part-time Staff**

Research Fellows:

OKUNAKA Yasuto

Acculturation and localization of Western music in modern Japan

ONO Makoto

Religious aspect of Buddhist and Shintoo rituals in ancient Japan

TATSUKI Chiyoe

Musical expression in Kabuki theatre

YOKOYAMA Kayoko

Variation of *Jiuta* and *Sookyoku* transmission: Comparison in performance of 'Shakkyoo'

System Administrator:

HIGASHI Masako

Maintenance of the Centre's network and homepage

#### **Administrative Secretariat**

Director: KANOO Noriaki

Chief: TANAKA Masao

Clerical staff: IWAKI Megumi

#### **Curator and Research Assistants**

Curator: SAITOO Hisashi

Research Assistants: IKEUCHI Yoshie, KOJOU Atsuko, SUEMATSU Noriko

### Team Research

#### Major Projects

New perspectives on music and performing art in modern Japan

Project leader: GOTOO Shizuo

Other members: DOI Ikuo, HIROI Eiko, HOSODA Akihiro, IMADA Kentarou, IWAI Shigeki, KAWAMURA Kiyoshi, MANABE Masayoshi, OKUNAKA Yasuto, SAWAI Manami, TAKEUCHI Yuuichi, TATSUKI Chiyoe, TERADA Mayumi, TERADA Shima, UEDA Manabu, YOKOTA Hiroshi

The traditional music of Japan in the classroom

Project leader: FUJITA Takanori

Other members: HIGUCHI Akira, IGUCHI Haruna, IMADA Kentarou, INO Yoshihiro, KATOO Tomoki, KOMODA Haruko, KUBOTA Satoko, MIZUNO Nobuo, MOTEGI Kiyoko, NAGAHARA Keizoo, OSHIO Satomi, SAWADA Atsuko, TAI Ryuichi, TAKEUCHI Yuuichi, TSUKAHARA Yasuko, TSUKITANI Tsuneko, YAMAGUCHI Osamu

#### Regular Projects

Research on performance of Jiuta and Sokyoku

Project leader: KUBOTA Satoko

Other members: FUKUDA Chieko, IGUCHI Haruna, ITOO Shino, KATAOKA Risa, KIKUOO Yuuji, KIKUSHIGI Yooko, MIYOSHI Akiko, NAKAI Takeshi, NISHIKAWA Kaori, NOGAWA Mihoko, OKUMURA Shintaroo, OKUDA Utanoichi, OKUMURA Utatomo, TOMIO Seiritsu, YOKOYAMA Kayoko

Research on the origins of *Gion-bayashi*

Project leader: TAI Ryuichi

Other members: ADACHI Keiko, DOI Ikuo, FUKUHARA Toshio, GOTOO Shizuo, HIGUCHI Akira, IRIE Nobuko, IWAI Masahiro, KAKITOO Toshihiro, MASUDA Takeshi, NAGAHARA Keizoo, NISHIOKA Yooko, UEKI Yukinobu, YONEDA Minoru

Studies of Japanese vocal text collections and their publishing

Project leader: TAKEUCHI Yuuichi

Other members: GOTOO Shizuo, HAIKAWA

Mika, IGUCHI Haruna, KUBOTA Satoko, ONO Mitsuyasu, MATSUOKA Ryoo, TAKEUCHI Michitaka, TANIGAITO Kazuko, TATSUKI Chiyoe, YAMANE Michihiro, YAMAZAKI Izumi, YOSHINO Yukiko, WATANABE Hiroko,

### Commissioned Research

Digital archiving of reel to reel tape recordings and its documentation

KAMEMURA Masaaki

Restoration and conservation of antiquated musical instruments

MIKI Shunji

### History

1991 The need for a new Kyoto centre for research on Japan's traditional music expressed by HIROSE Ryoohi at a planning committee for the development of Kyoto as a City Open to the Free Exchange of World Cultures

1993 Expansion of the Kyoto City University of Arts proposed within the New Master Plan of Kyoto City 1996 Founding of the centre for research on traditional music established within the Kyoto Action Plan for a town full of Vitality, based on the city's Development Plans for Arts and Culture

1997 Budget allocated for planning the new building and surveying the site

1998 Construction begun (completed early 2000)

2000 Commencement of activities (April); opening ceremony (December 2)

### Facilities

The Research Centre for Japanese Traditional Music is situated on the 6th to 8th floors of the University's Shinkenkyuutoo (New Research Building), with a total area of approx. 1500m<sup>2</sup>.

6th floor: Director's office, administration, committee meeting room, reference library, materials management room, individual office

7th floor: Seminar rooms (2), instrument storeroom, special collection

8th floor: Individual offices (5), fellows' rooms (2), audio-visual studio, training rooms (2)

---

## 編集後記

本センターの目玉の一つに、「所長対談」があります。今年度末には、2本の原稿が上梓されることになりました。

刊行が遅れておりました、小島美子先生との対談は、諸般の事情により、本報と同時に刊行される紀要『日本伝統音楽研究』第4号に掲載いたしました。付き合いの長いお二人の貴重なエピソードの数々を、ほとんど省略せずに盛り込みました。本報とあわせてお楽しみください。

現在ロンドンに在住されるアンドリュー・ガーストル先生との対談は、本報の冒頭に掲載いたしました。作業上の都合により、ガーストル先生のご発言部分につきましては、編集委員会の責任で修正するようお願いいただきました。先生のご趣旨から逸れないよう努めました。お気づきの点がございましたら、編集委員会までご指摘くださいますようお願い申し上げます。

本報は年1回の刊行を基本としますが、センターのwebページでは、随時、最新の情報を提供しておりますので、ぜひwebをあわせてご覧ください。双方の役割分担についても試行錯誤を重ねていますが、なかなか難しいものです。ご意見や新しいアイデアがございましたら、遠慮なくお寄せくださいますよう、お願い申し上げます。

編集委員 竹内有一

京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 所報 第8号 2007年3月30日発行 編集 京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 発行者 吉川 周平 〒610-1197 京都市西京区大枝沓掛町13-6 電話 075-334-2240 FAX 075-334-2241 E-mail rc-jtm@kcua.ac.jp <a href="http://www.kcua.ac.jp/jtm/">http://www.kcua.ac.jp/jtm/</a> 印刷所 株式会社 田中プリント
---

## Research Centre for Japanese Traditional Music

Kyoto City University of Arts  
13-6 Ooe Kutsukake-choo, Nishikyoo-ku  
Kyoto-shi, 610-1197, Japan  
Tel +81-75-334-2240  
Fax +81-75-334-2241  
E-mail rc-jtm@kcua.ac.jp  
<http://www.kcua.ac.jp/jtm/>

---

